

七月八日、九日、十日の三日間は松前相撲、一ノ矢一行の興行を見に行つた。毎日三百名足らずの入りがあつたらしい。そのうちに三四名毎日四五名の藝者をつれて行き、且、酔ひにまかせて相撲に五圓札、十圓札をやつてゐたのが、この不景氣な當地での先づ豪遊家等であらう。僕は渠等と共に、とうとう三日間を飲みつぶしてしまつた。

## 其廿六

七月十一日。晴。

愛する者からの便りがあつたが、それが無い間よりもあつた時の方が一しほ寂しく、心細い様な氣になつて、樺太といふところがいよ／＼深く僕の心に泌み込んで来る。東京との文通に早くても八日かかるし、電報を打てば外國なみに倍額を取られるし、日は長くツツて而も暖いのは僅かの間だし、事業に關係ある雜漁業者等は段々引き上げて行く時節が來たし、夕陽は遠くガスの海中に眞ッ赤な玉となつて沈んで行くし、南へ歸るものが多くして來るものが少い。考へてゐると、毎日よく當る玉突きも丸でミスだらけの時がある。樺太は實に酒と女と冒險事業との爲めにのみ生きてゐる島だ。

今日、或商家の店さきに腰かけて話してゐると、大道を通るものは鐘詰業者でなければ藝妓もしくは後家(酌婦)だ。ところが、突然、異様な洋服にわらぢがけの男が外國へ出す封筒をと云つて、四

角なのを買ひに來た。顔は日に焼けて飽くまで黒く、服は長く風雨にさらされて厭な臭氣を放つてゐた。冒險小説中の主人公たる資格は確かにある人物だ。話して見ると、アラスカ、サイベリヤ、北米、南米等の山野を跋涉した我國の砂金掘りで、今回樺太に目を附けて來たので、大泊からマオカまで約六十里間の山を三十日かかつて調査したのだ、随分見込みがあると云つて居た。この人、なか／＼多くの抱負を語つて居たが、北見の枝幸砂金の如きは我國人がうか／＼して居るうちに外國人に手を着けられ、その現物はすべて外國へ持ち運ばれてしまつたから、樺太では、成るべく早く自分等が着手して、自國の利益を失はない様にすると意氣込んでゐた。鳥渡したテントを携へてゐるので、銃さへあれば兎や何かを打つて、一週間ぐらゐ里へ出なくとも濟むさうだ。ここ三年間はまた跋涉に費し、それから最もいいと思ふところに先づ手を下すつもりらしかつた。

そばで之を聽いてゐた一老人が云ふには、その友人が露領の沿海州へ渡つた時焼酎一瓶を以て太い金の棒と交換してやつたことがあるので、自分も亦浦鹽行のついでに、帆船をそこへよせたが、今度は金の棒を持て來なかつたと。兎に角、沿海州にも砂金は多いさうだが、北海道でも、天鹽、北見の海岸では、砂をこして一人が一日に三分は採收することが出来るさうだ。樺太はなか／＼望みがあるとするれば、かの砂金家の勞力が空しく終ることはなからう。



## 其廿七

七月十二日。晴。

中川第一部長の西海岸巡察に伴いて行かないかと勧められたので、鳥渡ラクマカまでと思つて、政廳附屬の警邏船吹雪丸に同乗し、マオカから二里半さきの目的地に行き、樺太廳直轄の水産試験場を見た。實は鑑詰に關する試験もしくは研究があるならと思つたのだが、同場はおもに鹽製、燻製、しめ粕などをやつてゐた。その機械などは個人では持つことが出来さうにもないほどの大規模がある。然し技師のやり方がまづいので、無用の長物を持たしてあるも同様だ。ラクマカもマオカと同じく、けふが占領記念祭である。

そこで分れるつもりであつたが、もつと北行したらどうかと云はれたので、隨行員の仲間に加はつた。一行は部長を初めとして、マオカ支廳長、官吏二名、ほかに黑白社の岡上祖水氏と僕とである。中川部長は帝國大學にゐた時代に、『雑誌』『いらつめ』を發刊し、山田美妙齋氏をして初めて言文一致體の文を作らしめた人で、官吏としては鳥渡毛色が違つてゐる。而も經濟思想に富んでゐるので、調査の仕かたが一般の官吏とは違ひ、マオカでも人民からよく受けられたのだ。

オランドマリで各漁場、小學校、巡查派出所などを巡察し、宗谷ナイボで伐木林の様子を見に二十丁ばかり奥へ踏み入つた。途中には、種々の草花が咲いてゐた。マオカでは、山に入らなかつたから、馬ごやしの花と、薔薇に似てゐる濱なすと、花はあぢさゐの如く、葉は芍藥の如きにをの花（アイノ語しよツきな）とを見ただけだが、ここへ來ると、しよツきなは勿論、アイノの食料になるさく、アツシを織る織緯を供するかゆい草（いら草）、誰が袖、蝦夷菊の一種、金ぼうげ、裏白金ばい、百合、あざみ、さびたなどが花をひらいてゐた。その他、うど葉、七葉、うさぎ草、ここみぜんまい、とくさ、アイノねぎ（きとびる）などがあつた。さらに進んでヤチ（濕地）に入ると、木はタモ、イタヤ、泥柳、ハンの木、草は誰が袖、いら草、いたどり、ふき、ヤチ芭蕉（水芭蕉）などのために餘るのが生えてゐた。

支廳長は人並みはづれの背高童子だが、それが隠れてしまうほど延びてゐる蔭やいら草の間をかき分けて行く時、僕等は歴史前の人種が歎冬の廣葉のもとに生活した状態を想像せずにはゐられなかつた。兎に角、その大きな蔭や水芭蕉の間には、一面に木賊が成長してゐた。道もついてゐないところを通つて、漸く伐木林に達すると、谷の兩側は遠慮會釋もなく、楡松、蝦夷松を伐り倒してあつた。これでは亂伐を防ぐ嚴格な政策も止むを得ない必要だと思はれた。

船に歸つてから、一行は皆上着、下着をすべてよく改めて見た。山ダニがついてゐるかどうかを調べたのだ、或人はホワイトシャツに、他はまたも引きに、それを發見した。やがて僕の頸すぢがむ



づむづするので押さへて見ると、それも亦ダニであつた。ダニは必らず頸すぢへのぼつて来るさうで、一部長も、支廳長も、その他の人々も、相語つてゐるうちに、すべてそこで度々それを捕へたが、マチの火を近づけると、直ぐ死んでしまうのだ。鹽を嘗めて行くと取りつかないといふまじなひもあるが、取りつけば必らず毛穴に喰ひ込んで痛がゆいさうだ。

今晚はノダサンに遅く着して、一泊。一日の航程約二十六海里。

## 其廿八

七月十三日。晴。

ノダサンの宿屋へは後家(酌婦)が勝手に入り込んで来て客の爲めに給仕をして呉れる。昨夜もそれをこつそり引き込んで行つた客もあつた。けふ、朝飯を済ましてから、先づノダサン市街地並に殖民地の指定区域を見に行つた。意外に思つたのは、海には近いが、山間の平原を例のおほぶき、いら草、水芭蕉の間に既に市街の區劃が出来て、まだ道も附かないのに、本通何丁目とか、榮町何番地とか記す木標を打つてあることだ。而も實際の商業地、漁師の家などは、現今では別な處にある。樺太廳の政治はこの一事を見ても、官權を濫用する爲めだらう、僕等の卑しむ理想即空想に失し過ぎてゐる。然し、そのヤチ、乃ち、濕地なる平原には、宗谷ナイボの濕地で見たと同様な草木が多かつたが、松

が生えるだけの高地がない爲め、椴松や蝦夷松に最も多くついてゐるといふダニは少なかつた。して、あをぢ、小げら、ひたき、ひがら、うぐひすなど、小鳥の聲が聞えた。まむしに一匹出會つたし、キウと鳴いて逃げたのはリスであつた。

晝飯後、徒歩南へ一里半もどり、トウブツの土人部落を見た。二十四戸、百二十五人、半數以上は日本語を解してゐる。家屋も半數は土人的葦小屋を脱してゐる。にをの莖をちひさく刻んで葦の上に乾してあつた。土人等は山海の漁獵を以つてその日々を送つてゐたのだが、官憲からの保護と注意とがあるもので、山腹に多少の畑を作つてあつた。五六名の土人が、上へあがつて鳥渡立派な木造の家根を組建ててゐたが、老人が一人鬚を撫ながら、下から、『皆さん、どうか宜しい處でお茶をあがつて下さい』と云てゐた。其大工の住ひだといふ純粹の土人小屋は葦でかこつてあつた。戸をあけると、地べたに板を敷き、その上に葦を延べてあつて、周圍には、蒲團、獵具、食器、寶物入れなどが並んでゐる。眞ん中に爐が切つてあつて、その上の方に開き罅が二三尾つるしてあるが、それが爐火の煙でおのづから燻ぶる様になつてゐる。爐のそばに一人の老めのがあぐらをかいて留守居をしてゐたが、僕等を見ることがせず、おとなしく下を向いて、無言で、長い火箸を以つて灰をいじくつてゐた。同部落には、二歳の熊を檻に入れて飼つてあるが、それは今年十一月の熊祭の犠牲ださうだ。部落は眺望のいい丘の上にあるのだが、直ぐそこをトウブツ川に下だると、一軒、北海道のアイヌ小屋がある。



家族も多少日本化してゐる。そのちひさい子供が二人（男と女）が川で泳いでゐた。一行を案内するトウブツアイノに、『北海道アイノの、めのこでも、いいがあれば、お前等は女房にするか』とからかふと、『さうだねするものもあるし、しないものもあるし、いろ／＼だ、ね』と答へた。樺太アイノの顔は北海道アイノの如く猛悪でなく、性質も亦おとなしいさうだ。トウブツの辭で去る時、小學校の生徒が三十五六名濱へ出て見送つて呉れたが、再びこんな寂しいところへ來なからうと思ふと、そぞろ涙がこぼれた。殊にそのうちにアイノの子供が二名ゐたのが僕には忘れられない。

そこから更らに二三里南へもどり、中ノトロ岬や漁場を海上から視察し、僕の鐘詰製造所のあるオタトモの附近からノダサンに引ツ返した。ノダサンの北端にある小高い山に名がないので、僕等は船中で寢獅子山と命名した。獅子がつつぶしてゐる形であるからだ。

今晚も亦ノダサンに一泊。

## 其廿九

七月十四日。夕方鳥渡雨。

朝、ノダサン出發、先づ船をアラコイに着け、その山奥なる山林濫伐の跡を見に行つた。露領時代に濫伐したのださうだが、椴松、蝦夷松などが縦横に切り倒されたまま腐りかけてゐるのもあつ

た。もとは密林であつたから、風に堪へる用意を必要としないので、如何に大木でも、根が深く這入つてゐない。それが、濫伐の結果、あたりに相持ちの木がなくなつたので、一旦風に遇ふと直ぐ浅い根からおけてしまつたり、さうでなくも、幹の弱い部分から折れてしまつたのだ。その上、樺太の山林は地盤がぼく／＼してゐて、内地に於ける眞土の様なもの丸で見られない。有史以前からの木の葉や枝や枯れ木などが積み重つて、それがまだ腐つてゐるだけの程度であつて、僕等の内地で見る山の土とまではなつてゐないのだから。一たび山火事となると、立ち木が焼けるばかりでなく、其土からして燃えて行くのである。それを思ふと、赤い色の木朽れ土を踏んでゐる僕の足が熱くなる様な氣がした。然しました、もつと深い密林に入つた時、オゾンの臭ひが強く僕の鼻をついて、實に氣持ちがよかつた。黄いろい花の山百合が諸所に咲いてゐた。黒百合や鈴蘭もあつた。また、赤はらといふ鳥がゐた。二三日、熊が出たといふので、僕等はあらかじめ船の汽笛代用の喇叭を用意して行つたら、往きにも復りにもそれを吹いて通つたが、海岸へ來たら、それがまた本船から聲を呼ぶ用を辨じた。

そこから引きあげる時、トマリオロまで行く一婦人が同船を頼んだ。大膽な女で、第一部長や支廳長を捕へて訴へるところを聴くと、ノダサンに早くから來てゐて、家まで建築したのに、豫定の市街地へ轉居を命ぜられたのだが、ただ一軒、まだ道路も開鑿されないとこへ移つたとて、商賣が出來



ないから、別に一ヶ所願ひ出てあるところを公平に許して呉れろといふのであつた。「おかみさんがもつと若かつたら、なんとかしてやるのだが」とからかふと、「これでも、天下に一人と思つてゐる人にはお役に立つてゐます」と笑つてゐた。

船をチイカイナイボに着けると、その驛遞の馬が雌馬を追ツかけるとたんに、崖からころけ落ちて、海岸に死んでゐるのを見た。樺太は一帶に海岸が狭く直ぐ低い崖になつて、その上が平地であるが、その平地は勿論、崖にも百合に似た黄色の花を開く管草と紫陽花に似たしよつきなどの花が一面に咲いてゐる。そこから西海岸一の難道が山を通じてゐるのを踏査した。そこは急激な崖の爲めに、海岸を、波の荒い時は、通れないのだ。その山にはアイノがブシ箭に塗る毒を含むブシ（とりかぶと）の花が、毒々しい紫色を持つて澤山咲いてゐた。また、鶯の聲が方々に聴えた。

一里さきのカモイナイボから船に移り、トマリオロに来て、一泊。この日の航程二十二海里。

其卅

七月十五日。晴。

午前五時半、呼び起され徒歩發程、トマリオロ炭礦に向ふ。霧の多い朝で雨の様にぼたり／＼と衣物の上をしづくが傳つた。指定の運炭用輕便鐵道を通ずる爲め、ヤチ（濕地）または森林を五間幅ぐ

らゐりに切り開いてある。その道に當つて、木橋または鐵橋をかけることになつてゐる。ところが、まだかかつてないので随分危険であつた。殆ど道もない様な絶壁を綱にたよつて登り下りするところもあつた。途中で見た物のうちに、熊が栗鼠を追ふてよぢ登つた爪の跡がついてゐる榎松の幹もあつた。

また、鐵道に當る附近を流れるトマリオロ川で、どぶ貝（ひより貝）が澤山取れるのを見たが、古來誰れも取る人がなかつた爲めか、かさなり合つて、互ひに朽ちかかつてゐるものもある。身はまだ生きてゐるが、殻の方がさわると直ぐ崩れるものもある。その貝から小さい眞珠が取れるので、あやふやな鐵道工事に使はれるよりもその方がいいと思ひ、貝拾ひに専念する様になつた工夫も澤山あるさうだ。

二里ほど這入つたところに、炭礦事務所や官宅などを建築する多くの木材を用意してゐる。なかば組み立てられたのもあつた。深い山林の間で新らしく削られた材木の臭ひはなか／＼なつかしいものだ。そこから直に第一、第二の礦口があるのだが、いづれも六七十尺のところ絶えてゐる。尤も、うはツつらのところだけを掘つて見たので、下へはずつと炭層がつづいてゐるさうだが、掘りだしたのを見ると、まだ僅かに四五十噸だが、炭質は餘りいいと思へない。おまけに着手前に行ふべきボーリングを着實にやつてない様子だ。そんな状態で鐵道工事や官宅建築などをやるのは、順序を轉倒してゐるのではないかと思はれた。その上、港灣の用意もなく、賣れ行きの見込みもついてゐないのだ。政府の威光でこそやれるが、民間ではとてもやれない無謀の仕事だ。僕は全く失望したので、まだ



そこから一里半さきに近頃發見した十三尺層があるといふのを見ずに歸つた。全體樺太の炭山は斷層の多いのが缺點だ。

ところが、十三尺層を見て來たものに聴くと、それはその實三層が三つ重なつてゐるので、その間に二尺宛のハサミがあるのださうだ。然しその方は炭質もよく、随分見込がないではないとのことだ。兎に角、トマリオロの海岸には、つい、こないだまで八十箇ばかりの葎小屋があつたのが、今日ではそれが木造に變はり、且つ、戸數も二百戸に増した。僕等の一行が三ヶ所に分かれてとまつた宿屋も、すべて開業してからまだ數日を経過したばかりで、食物や宿料の標準がまだ定つてゐない様子であつた。今までは商賣もすべて漁業者を目的としてゐたばかりだが、今日急激な發展が出來かかつたのは、してトマリオロばかりが樺太中の不景氣を知らないと云はれるのは、いつ中止されるかも知れない炭礦をたよりに、一儲けしようとするものらが集つて來るからだ。然しその多くは、内地で失敗し、樺太へ渡つて三たび失敗した喰ひつぶし者等だ。トマリオロの祭日であるから、商家の人々も殆ど全く家業を休んで遊んでゐた。藝者の手踊りやら、若い衆の擊劍仕合ひなどがあつた。今晚も亦トマリオロに一泊。

## 其卅一

七月十六日。夕方、雨。

晝飯後。トマリオロ出港。岡上氏が僕等に別れ、樺太日々の山野天海氏が一行に加はつた。先づ、チラホナイ（詳しく云へば、チラオフナイボ）の土人部落に船を寄せた。迎へに來た舳は十人漕ぎであつた。樺太の舳は一般に艫を用ひないで、みよしの左右の輪繩に櫂をさし、ボートを漕ぐ様に後ろ向きで漕ぐのだが、それが左右に五人づつ、して艫にも一人櫂を以つて舵取り代りをやつてゐた。そのうち、一人が音頭を取り、エヤホー、ホラホー、ホラホー、ヘヤホー、ヘヤホーと五様、六様に繰り返すと、その度毎に他はエンヤラヘーと應ずる。エヤホー、エンヤラヘー、ホラホー、エンヤラヘー、ホラヘー、エンヤラヘー、ヘヤホー、エンヤラヘー、ヘヤホー、エンヤラヘー。これが調子よくすべての櫂の手を整へて行くのが、僕等には如何にも愉快に感じられた。而もそれが寂しい樺太の海に響くのである。

チラホナイには、さきにわが政治を慕ふてそこから石狩に移住したアイノが歸つて來て、部落を成してゐる。北海道にゐた丈一般の樺太アイノよりは智識の程度が高い。字もよく讀める代りには、取り締りの番屋（建網業者）を経ずして直接に官憲に理窟を云ひに來るものもあるさうだ。めのこも大抵は日本風の髪を結つてゐる。家はトウブツ部落に見た様な新築もなかつたが、それは石狩へ行つてまた歸つて來たりしたから、止むを得ないのださうだ。山田シロクランケと云ふアイノの家を音づれ



たが、家はロシア式に太い丸太を横に組んで壁にしてあり、中は真中が土間で、その兩がはに、二つ宛爐を切つた板の間の廣いのがあり、その奥は兩がはとも一段高くなつて床の間の通しである。そこに家族がずらりと枕を並らべて寝るのだ。主人の床らしいのが左の間の中央にあつて、熊の皮を敷いてあつた、ここは特別に廣い家らしい。床の端に『警官席』と書いた半紙が張つてあるので、そのわけを聴くと、こないだ、ここで部落の人を集めて、浪花節を聴かしたのださうだ。

十一二歳の女のこが黄色の花と紫の花とを携へて行くのに會ひ、それをどうするのかと尋ねると、『百合とあやめ——佛さまにあげるのであります』と答へた。この部落でにをのことをフレキナ(?)と云ふのを知つた。四十六戸、百六十四人ゐる。漁獵のほかに、ジャガ芋、大根などを作る様に教へられてゐるが、アイノは一體に永住と貯蓄の念に乏しい。このも同じことで、かねがあると、直ぐ子供の衣物や女房の腰巻きを買つたりして、そのあとは皆飲み料に費つてしまふ。醫者が行つて薬を與へても、大抵はそれを病人に飲ませず、うはうるし、黄蓮、きとびるなどの葉や根を煎じるのだ。して、出來物には鼠の皮を削いで張りつける。樺太廳はアイノ一般の爲めに四五ヶ所の漁場を興へ、番屋をしてそれを經營せしめ、その収益を廳に於て預り置き、土人の教育、衛生等の費に供してゐる。僕等がチラホナイの番屋に休んだ時、アルメニヤ人が一人クスンナイから馬に乗つてやつて來た。何か物を借りに來たのだが、貸したらそれを返すことがないさうだ。

それから、クスンナイに來て、一泊。この日の航程十三海里。

## 其卅二

七月十七日。雨。華氏寒暖計五十度(室内、午後三時頃)

クスンナイは露領時代にも東西兩海岸の聯絡地で、なか／＼重要なところであつた。樺太全島南北に二百四十里その間に於て、ここだけが僅かに七里の地峽を成してゐる。とどろき峠といふのが少し難所であるだけで、その東西は殆ど平地だ。して、クスンナイ川を境として日露兩國民がその勢力範圍を争つた時代もある。國境標石があつたが、それはどこにも見當らない。或人の話によると、露領へ去つたアイノが持つて行つたさうだ。地勢と氣候もここから多少變つて來た。川をさし挿んで、廣い平原があり、紫あやめが一面に咲き亂れてゐた。また、菅草、百合、濱なす、しよツきな、野えん豆などがぼつ／＼咲いてゐた。それに軍政時代に露人から横取した牛馬を飼育してゐるものがあつた。牧場としては樺太一であるさうだ。その間を通つて、僕等は露人が經營した舊市街を見に行つた。新市街からは一里半ばかり奥である。露國人は全く海の觀念がない。漁業などは渠等の名義で許されてゐても、日本人の手で經營さし、渠等はすべて奥へ這入つて、農牧兼業をしてゐたのだ。横丸太造りの小屋が三十號まで残つてゐる。今でも露人が二戸、七名ゐるが、いづれも本國で殺人罪を犯



し、歸國することが出来ない囚徒だが、その割合におとなしいさうだ。チラホナイで見たアルメニヤ人もその一人である。別に韓國人が三名、木挽に従事してゐる。先住者の耕作した畑の捨てられたのを見たが、馬鈴薯の芽などがひとり手に生えたままになつてゐる。眞岡支廳クسنナイ出張所は、今、この大きなロスケ小屋に置かれてあるが、やがて、新市街の方へ移されことになつてゐる。僕等は出張所で中食を濟ませ、それから露人の棄て去つた墓場を河口に弔らつて、宿へ歸つた。

クسنナイ新市街も寂れたものだ。三十九年、四十年の景氣につれて建ちかかつた家も、建築中に見込みがつかなくなつたので、荒壁のまま住まれてゐるのがある。本通りの眞中には、草がぼうぼう生えてゐる。本年五月末の調査で百二十六戸、六百二十九人であつたのが、一ヶ月半後の今日では、六十戸、三百二十三人に減じてゐる。新開地が一ヶ月や二ヶ月で變遷する状態を目撃しては、そぞろの感を催さざるを得ない。有志家が一部長に来て申請するところを聴いても、何等の進取的氣風を見せない、ただ内輪喧嘩を暴露するばかりだ。それから見ると、かのノダサンの女が船中で大膽に不平を漏らしたのは、却て筋道が立つてゐた。

小學校を見に行つたが、眞宗坊主の細君がなか／＼上手な上方辯を以つて教へてゐた。トウブツでも、クسنナイでも、すべて單級教授でやつてゐるのだ。

けふは風雨が烈しいので船を出せない、吹雪丸は僅かに百五十七噸の小蒸氣だ。

## 其卅三

七月十八日、雨。華氏寒暖計四十八度（晝間、室内）

低氣壓、宗谷海峡に起り、北に向つて進む爲め、海上危険との報、大泊測候所から来る。爲めに、クسنナイに第三夜を送ることになつた。段々寒い方へ向ふので、シャツと股引とを買つた。何の用意もなく、マオカを出て來たのだ。

七月十九日、晴。華氏寒暖計五十九度（午前九時、海上）

朝、六時、クسنナイ出發、途中でライチシカ湖（死んで泣く湖）を見るつもりであつたのだが、さきを急ぐ爲め海上から望んだだけだ。同湖の口を入れれば、必らず生きて歸ることが出来ないといふ土人の傳説がある。この邊から、もう、特許漁業家の番屋があるだけで、海岸にそれ以外の住民はないのだ。小魚を追つて來たのか、海豚の群が何百尾となく船の前後について來て、面白さうに海上を飛んだり、跳ねたりして、二十分間ほど僕等を離れなかつた。また、鷺が一羽飛んでゐるのを見た。イチャラ山は富士によく似てゐる。

午後三時半、ウシヨロ灣に着す。寒暖計華氏六十三度。灣内の土人部落を巡視したが、土着アイノ二十六戸、百五名、北海道十勝アイノ七戸、三十一名ゐる。別に滿州土着の山丹人三四名。アイノは



何處でも山獵が得意だが、昨年の秋(雪の降り出す前)に、貂を一人平均三匹づつしか取れなかつたさうだ。して、熊は部落中でたつた一匹であつたさうだ。その他に取れるのは、狐、河獺などだ。明年からは漁業の手傳ひもするし、畑も耕すと云つてゐた。ここにも二歳の熊が飼つてあつた。めのがぞろ／＼出て來たので、よくその状態が見えた。口のはたの入れ墨は必らずしも所天の有無を示めすのではない、して腕にも手くびまでは墨が這入つてゐる。女でもマキリ(小がたな)を腰にさげてゐるが、所天のないのは鞆ばかりで、身を入れてない。さくの莖百合の根を澤山乾してあつた。越年食糧の用意で、百合の根は碎いて米にまぜるのだ。渠等は山獵に十里も二十里も奥に這入るのだが、腹の工合が違ふのか、秋あぢ(鮭)一尾で一週間も出て來ないでゐるさうだ。一般に跣足だが、僕等の出迎へには、黒足袋の上に草鞋をはいてゐた。出迎への土人はすべて黒びらうどの、筒袖で、胸をぼたんとめた、膝までの衣物(霧領アレキサンドルから來たる)を着て、細い紐をしめてゐた。して、額をズツと削り込んだ頭の眞ツ黒な髪をふさ／＼と肩まで垂らし、上ひげも多く、頬ひげ、顎ひげの長いのがずらりと海岸に並んでゐるのを見た時は、今までに見た部落ではおぼえなかつた寂びと凄みとがあつた。渠等は銀色の大きな耳輪をつけたのを誇りとしてゐる。土人の總代なる、可なり日本語を話すのに、宗旨は何かと尋ねると「神道の様なもので、萬物みな神」と答へた。ウシヨロの番屋にはマスコといふ小鳥が捕へてあつたし、その近處に露國人の残した葷畑があつ

て、白い花を咲かせてゐた。ウシヨロには、葎の様な草が一面に生えてゐて、その間によもぎが群生し、ぼつ／＼百合の花、さくの花が咲いてゐたが、クسنナイで澤山見たあやめは少しもなかつた。腹工合が悪くなつたので、船に移ると、直ぐブランデーを飲んで横になつた。午後十時半、北ナヤシに着す。船中から夜の空を仰げば、北斗は僕等の頭上に輝いてゐた。

この日の航程九十四海里。

#### 其卅四

七月七日。晴。華氏七十六度(午前十時)夜に入りて、雨。

昨日、午後九時半に日が暮れたさうだが、けふは午前二時に全く夜が明け離れた。

ナヤシとは、アイノ語で大きなよもぎのあるところと云ふ意だが、ここが西海岸最後の都會(?)だ。戸數四十、人口百八十。そのうち、残留露國人九戸、六十八名ゐる。昨年十二月から名好支廳が設けられ、ロスケの元教會堂に置かれることになつた。朝、一行は二手に分れ、一方はナヤシ川を曳船でさか登り、沿岸の林相を見に行つた。僕等はまた支廳の露語通譯をつれて、ロスケ部落を巡視し、レーフといふポーランド人の家族を訪問した。牛と豚を飼つてあつて、農牧を兼業し、冬になれば、熊や貂を取るのだ。老人夫婦の外に、子息二人とその若い女房等とこの三夫婦の子供と、十二三



人の家族だ。老爺は十五年前、アレキサンドルの獄から出て来たもので、今では家族が多いので、どこへ行つても同じことだから、いッそのこと慣れたこの地で暮すと云つてゐる。無教育なもの等で何か読む書物があれば見せろと云はれ聖書の古びたのと宗教上のパンフレトらしいのを出して来たが、子供が少し見ただけで、その他は誰れも分らないと答へた。露領時代には烏渡した寺小屋見た様なところがあつたさうだが、日領になつてから、歸國したものが多かつたので、教育費などの出どころがないのらしい。それでもマリヤ並にキリストの肖像畫を居間の兩隅にかざつてある。居間はたツた一室で、そこにペチカといふ釜土兼用の暖爐があり、食堂、寢室、應接間を兼ねてゐる。親は寢臺に上り、子供はすべて板の間に蒲團を敷いて寝るのだ。僕等はその板の間へ靴または下駄のままのぼつたが、その子供もどろ足のままあがるし、犬や庭鳥も平気で這入つて来る。室の中央に搖籃がつるしてあつて、二歳になる子を入れて、『バイバイ』とゆすつてゐた。それが泣き出すと、そこから抱き取つて母は板の間に足なげ出して愛しらつた。その若い母はここで有名な美人で、耳輪をはめてゐた。婦人はすべて帽子の代りにハンケチまたは布呂敷見た様なものをかぶつてゐる。子供はすべて跣足だ、労働日であつたから、何れもきたない體裁をしてゐた。多少の慰安になるのならう、手風琴を備へてある。また家族がいつか取つた寫眞や、マチの箱から剝ぎ取つた商標繪などを壁に張りつけてある。浅草公園の安ッぽい繪ハガキもあつた。漢詩を二行に書き下した掛け軸を額の如く横に張りつ

けてゐたさうだが、取り去つたのか、今では見えなかつた。無學な主人ではあるが、露西亞風の熱烈な應待ぶりは、語を解しない僕等にもその半ばを丁解せしめた。

## 其卅五

移住當時の獨力開墾から自慢話しを始め、自分の飼育した馬がアレキサンドルで五百圓に賣れたむかし話をやつてゐるかと思へば、直ぐ近頃にして、日本人の醉漢が暴れて来たのを、鉄を持つて追ッばらつた喧嘩ばなしになつてゐる。やがて自分の取つた熊の皮二枚を出して来て室一杯(八疊敷位)に廣げ、その上に寝ころんで見せ、二枚で五十圓なら賣らうと云つた。僕等の一人が四十圓に價切つたが、話がまとまらなかつた。日露戦争時代の石版繪が二三枚あつた。露探で清國から秘密をもたらし得た十三歳の少年の行爲を書いてあるのと、一青年士官が日軍の包圍攻撃を受けて奮戦する繪とを、分けて呉れると頼んだものがあるが、子供に見せて説明してゐるから、やられないと答へた。僕等は黒パンと紅茶とを御馳走になつて歸つて来た。その禮として一圓札一枚を與へた。渠等はすべてわが國の煙草を、木ツ葉をいぶす様だと云つて喫しない。酒もさうだ、して強酒ヲツカと露西亞煙草とをアレキサンドルからの輸入によつて供給されてゐたが、今度、税關が設けられたので、渠等は非常に困つてゐる。露人の畑には、青い草の間に、白服、赤服の男女が、夫婦幾組にも分れて、睦じさうに



牧草の刈られたのを返してゐた。また、ジャガ芋と大根とがよく出来てゐた。一ヶ所ライ麦を搗く風車があつた。僕等は日本人雜貨店で、煙草と板茶と露西亞更紗とをみやげに買った。

曾て樺太の露人が本國へ出した手紙を翻譯した人がある。その文中に、樺太はいいところで、氣樂に暮せる。丸で樂園の如くだから、早く殺人罪でも犯してやつて来いとあつたさうだ。それくらゐ無學で、無道德で、國家的觀念のなかつたもの等だから不思議はないと云へば云へよう。郵便局員から聽くと、一昨年九月から、今日に至るまで六十餘名もあるロスケ部落から、一回も手紙といふものを出したことがないさうだ。ただ、毎週六日間を山野に勞働し、日曜日と教祭日には多少身邊を飾つて遊ぶ。男は酒一つが何よりの好物らしく、昨年までは晝間でも道ばたに酔ひつぶれてゐることが多くあつたとの話だ。そんな状態だから、僕等の訪問したレーフがその子息の女房を挑んだ爲め、親子の間に別居問題が持ちあがつてゐるといふうわさがあるのも、さう怪しむには足るまい。

この地で貂取り道具の説明を聞いたが、アイノもロスケも同様に單純なもので、馬の尾を輪にしたわなを川に渡した丸木の中途にかけ、そこを通ると仕かけの弓が挑ね返つて、貂を馬の尾で締めると同時に川水におぼらすのだ。この動物は水には至極弱いさうだ。その皮は一枚十八圓から三十圓する。

昨夜、或酌婦が別た酌婦を毒殺しようとした事件があつた。

今晚もここに一泊。吹雪丸を僕等よりさきに巡回中の前田第三部長の用で南へ行かしたので、明朝

それが歸る筈。

### 其卅六

七月廿一日、雨。華氏七十度。(午後三時)

未明に歸つてゐるべき船がまだ歸らないし、雨も降つてゐるので、出發が出来ない。退屈紛れに再びレーフの家へおとづれて見た。中川第一部長が熊の皮を買ふつもりであつたからだ。午前十時頃であつたが、戸外の働きが出来ないので、家族はすべて家にゐた。働いてゐるのは婦人連ばかりで、それがいづれも跣足であつた。主人の老爺は寢臺の上でぐうぐうと眠つてゐて、暫く起きなかつたが、僕は昨日の通り腰かけて陣を取り、他の人々を相手に主人の起きるのを待つた。弟の方の細君(十五六歳)は子供等と共に支廳長を指さし、『ロスキイ、ロスキイ』と笑つてゐた。露國人の如く背が高いからであらう。やがて主人が欠呻をして起きて来たが、今日の様な天氣には眠くつてと呟きながら、暫くまた挨拶をしなかつた。やがて僕等と握手し、例の熱烈な態度を見せ出した。皮をも亦板の間に廣げた。一人の子供は得意げにその上にころがつて、おれの兄が取つた物だと云はないばかりであつた。やがて黒パンと紅茶とが出て、今回は生バタが添へられた。老爺は細長いうすの様な物を持つて来て、それでバタをつきまぜる眞似をして見せた。家族の者等は皆聲を上げて笑つた。して、熊



の皮は二枚四十五圓で賣られた。僕等はまたそれから一雜貨商店へ立ち寄ると、年寄りのロスケが來てゐたが、それが更紗を餘分に持つてゐると云ふので、分けて貰ふつもりで、持つて來させると、赤地に妙な小形の附いたもので、蒲團・座蒲團のおもてや子供の衣物には面白いのであつた。僕等がそれを値切つてゐるうちに、ロスケの老細君が遣つて來た。亭主がその賣り代を直ぐ飲んでしまふかと思つたからであらう。僕等の一人がまた、ロスケの持つてゐる煙草袋、ロシヤ更紗で出來たのを買はうと云ふと、ロスケは眞面目くさつてビール一本と交換しようと言へた。老細君は異存もなかつたかしてからくと笑つた。熊の皮をその取り主が宿まで届けた時、子供が四名跳足で雨の中を跟いて來たので、——これは監視がてら、老爺がつけてよこしたのだらう。——代價と共に菓子と與へて歸へした。

夕方雨が歇んでゐたので、僕は獨りでまたロスケ部落をぶらついて見ると奥庭で木挽をしてゐる者もあつたが、多くは家毎に門その板壁に蹲んで、男も女も、先づ今日の仕事が濟んだと云はないばかりに睦まじさうに語り合つてゐた。して、子供は手を引き合つたり、追つかけ合ひをしたりして遊んでゐた。その間に、わが國人の子供もひとりふたりまじつてゐた。

當地にも漁師相手の料理屋が二軒あつて、その一軒の女主人公はもと有名な地獄で、占領ごけの稱がある。この女の行かないところは開けないと云はれたくらゐだ。鳥渡見ても、最も肉的な女だが、

背は高い、格腹は大きく大力と豪膽とを以つて樺太全島を股にかけた。函館から初めて渡つて來た時、大泊に根據を据ゑ、ビールと身體とを元手に多くの獨身男子を搾りあげたが、官吏なども初めは、官等順で關係したといふ滑稽もある。それが豊原で自然に新らしい遠征女軍に追ひ拂はれ、十九里の山道を、ビール四ダースを背負つてマオカに來たり、むしろ小屋を設けて、其處にまた獨りで多くの客を迎へ、二三千圓を儲けたが、守備隊中の一軍曹に打込んで總てを巻きあげられた。それから男を非常に恐れ出したが、いつの間にかこの地へ來て、今度は自分が主人で二三名のごけを養つてゐる。若い亭主があつたさうだが、その妻子がやつて來たので、綺麗に手を切ると同時に、三四百圓と妻子の衣物とを拵らへてやつて、本國へ歸へしたさうだ。して自分は直ぐまた別に男めかけを置いてある。今年四十二三歳だが、これまで北へ北へと向つて來たから、更らにまた國境を越えてピレオまでも行く氣ださうだ。

## 其卅七

七月廿二日。ナヤン、午前雨。午後晴。華氏六十度(午前十時)

南へ行つた船がまだ歸らないので、一行は心配し出した。その上、退屈で仕方がないので、占領ごけを呼んで身の上ばなしを聴いたり、支應や郵便局や雜貨店へ行つて話し相手を見つけた。僕



は、たださへ腹工合が悪かつたのが、水の悪い爲めになほ更ら悪くなつて殆ど絶食の有様だ、宿屋は近頃出来たのだが、それがもと濕地中にあるので、雨の後は、周囲がすぶくしてとても尋常では歩けない。

僕は、けさ、午前五時そとへ出で、から傘をさし、草葉の露をふみ分けて製粉風車を見に行つた。ところが、そのそばに薙をから傘がたに建てまわして、それに住んでゐる夫婦者があるのを發見した。聴き糺すと、或漁場に使はれてゐたのだが、六ヶ月間も使はれて一文も給金を呉れなかつたので、歸るにも歸られず、歸國の旅費をつくる爲め毎日人仕事に出てゐるのだ。して、此最も貧しき薙小家のあたりには、いろんな花が咲き亂れてゐた。樺太の花は毒々しい紫が割合に多い様だ、プシのを初め、あざみ、裏白金ばい、あやめ、野豌豆など、すべてそれだ。黒百合も亦、その實紫の花を開くのだ。

ナヤンは露國人の部落がある上、秋になれば、貂取りの露人が澤山露領から這入つて來るので、露國貨幣が跋扈してゐる。露貨一ルーブルは實際一圓十錢の價があるが、當地では九十錢に受け取り、それを函館まで持つて行けば、少くとも一圓八錢になる。また、ビールは一本今では三十錢だが、越年時になれば、七八十錢に騰貴する。だから、若い商賣氣あるものが、越年前にビールを仕込んで來て、越年期にそれを高く賣り、それから露貨を買ひ込んで歸れば、兎に角、望外の儲けがある筈だ。越年期は十一月から翌年四月の中旬までで、その間は、船が結氷または流水の爲め來ないから、酒で

も飲むほか楽しみはない。ビールが、料理屋一軒で一晩に四ダースは出る。して、今年の如きは、十二月に既にビールも酒もなくなり、正月を焼酎で送つたさうだ。米なども、豫算が狂ふと、小包で取り寄せるものがあるらしい。

餘り退屈なので、僕は當地のおもな官吏を招いて御馳走をした。午後七時頃、硝子越しに窓外を見ると、日はまだ二三竿高いのに、ガスの爲めに光を消され、眞ツ赤な紅色を呈してゐた。これは樺太風景の中の一特色で、今夜の三日月も亦白くなくして、薄紅色であつた。宴會の最中に、聴き慣れて來た汽笛の聲が聴えたので、一同は勇み立つた。明朝はいよいよ北方に向ふことが出来るのである。

### 其卅八

七月二十三日。華氏六十度。夜に入りて、雨。

朝七時頃乗船。北に向ふ。樺太は北に行くほど山が高く、火山的にさきが尖がつてる。三十七海里を航して國境安別の沖に來た時は、午後一時頃だ。昔の地圖にトルストイの鼻となつてゐる安別の岬の絶頂には、國境標の柵が見え、その鼻から續いて露領に延びた低い草山は、灣形にまた突出して、富士形に隆起してゐる。我國人は之をピレオ富士と稱するさうだ。僕は安別に降りて、そこから、切り崖の様な山腹に細い道を切り拓いた稻妻形をのぼり、寫眞師をつれて、國境標のあるところへ行



つた。柵を繞らした中に、花崗石の標があり、南面には菊の紋、北面には鶯を刻してある。一行のうち、それに獨りでもたれて撮影さしたものが數名ある。天海氏と僕とは南北に腰かけてうつした。それから、一行全體をうつした。うしろの山を望むと林空が一直線に東の方へ走つてゐる。これが乃ち國境で、五六間幅に山林を切り拓いて出來てゐるのだ。

よく晴れた日には、沿海州が見えるさうだ。ここから六十海里しかない。黒百合の咲いてゐる草間の細道を通つて、山上の國境を越えた。して、海岸に下りると低い草山が綺麗な砂濱と共に灣形を成して十餘丁走つてゐる。その鼻に富士山のような小山が立つてゐる。わが國人の所謂ピレオ富士だ。その麓にまた熊谷氏の露國政府免許の漁場がある。其處に近づいた時ゴールを被つて洋装の小娘がやつて來たのでロスケの子かと僕が案内者に尋ねると、「いや、あれは私の娘です」と答へた。僕の爲めに通譯の勞を執つてくれるのであつた。ピレオ富士の裾を通り抜けると、また同じ様な砂濱がつづいてゐる。燃木を盗みに來た蒸汽船が一隻乗り棄てられたのがあつた。濱に添うた低い草山の腹には、ところどころ石炭が露出してゐる。して、支那人が澤山ゐて、炭を手掘りにしてゐた。さういふところを一里ばかり行くと、ピレオだ。

ピレオには、露國政府の林務官がゐて、漁業取締を兼ねてゐるが、其人は何處かへ出張中で、留守であつた。また、製材會社があつて、輕便鐵道を以て山奥から木材を多く伐出してゐる。伐り出した木

材は、削りもかけないで其儘濠洲へ直輸送するさうだ。僕は其木の長さを杖で私に計つて見たら、細いのは一丈二尺、太いのは八尺あつた。僕はスミルノフカといふ人の家で休み、ビール、パン、玉子焼、牛乳等の御馳走を受けた。この人はもと醫者で、毒殺犯の爲めに流刑に處せられたらしく、其細君も亦罪人だが今は夫婦共おとなしくなつて、農牧、商業を兼ね、秋になれば、貂皮の仲買人として日本領へもやつて來るのだ。僕のつれて來た通譯者は一年半ばかり此處に世話になつてゐたので露語を覺えたのださうだが、今、僅に十四歳の小娘だ。夫婦は、子が無い爲めか、畜類を可愛がること非常だ。牛、豚、犬、鶏、鶯等を澤山飼つてあつた。室内はペチカの爲めに熱苦しいので、庭の涼み臺で、海を見ながら話をした。窓内にぼくしやと秋海棠とが咲いてゐるのを見た。

そこを辭してから、ギリヤーク人の部落を見に行つた。樺太には、アイノの外に、山丹オロチヨン、トングース、ギリヤークなどいふ土人がゐる。ギリヤーク人は東海岸には多いさうだ。西海岸には、ウシヨロの北、エストル川の近處に二戸あるが、其處へは行かなかつたから、ここに來て見るのが僕の一の目的であるのだ。同人種は滿州から渡つて來たものか、それとも、本來の土人だか、支那人化したものか、何れとも分つて居ないらしいが、兎に角、髪結び方も、服裝も、共に支那風だ。して、女は皆おほきな耳輪を、二つもはめてゐる。家は今まで見たアイノ部落のよりも小さく、また穢い。一戸必ず一隻の磯舟を備へてゐる様だが、艦の左右には、キツと紋章が付いてゐる。其中、細い巴もあ



るし、また寶珠の玉で其尻尾が上下左右に出た様なものもある。近頃越して來たのか、まだ天幕生活をしてゐる一組があつたが、其所有船に積である財産の中から、變挺な匙と食器と(何れも木製)を譲つて呉れいと交渉すると、夫は承諾したが、妻が昔から傳はつてゐるものだからと云つて、なか／＼承知せず、終に夫婦喧嘩を始めた。

この部落の側に、日本人の商店と淫賣屋とが一軒宛ある。淫賣屋には六名の日本淫賣がゐるが、何れも洋服でロシア人や清國人を迎へてゐる。僕の見に行つた時は、午後三時過だつたが、露清人が十四五名ほど順番を待つてゐた。家の者等が先づ茶でも飲んで行けと云つたが、僕は中の廊下(左右の室には中から錠がおりてゐた)を通り抜けた儘、主人と立ち話をして別れた。若い淫賣も三名ばかり見送つてゐた。渠等の中には、浦鹽から舞ひもどつたのもあるし、マオカから行つたのもあるさうだ。

僕はもつとさきへ旅行する積りであつたが、下痢が如何にも苦しいので、引き返すことにした。して、四五丁來た濱邊の流木に腰かけ、見聞を手帳に控へてゐると、山の上から露兵が遠眼鏡で見てるのに氣が付いた。

ピレオ富士の裾で通譯者に別れ、案内者と僕とはまた濱邊を急ぎ、國境の鼻を磯づたひに安別に歸つた。

## 其三十九

七月三十日。曇。華氏最高七十四度、最低六十四度。

弟の病氣は全く平癒した代りに、僕が旅行から引き續き氣分がすぐれないで困つてゐる。玉突きは僕の留守中に百點に上進してゐたが、殆ど當らない。ただ運動の爲めに、負けても突くことは突く、他に身體を動す機會がないのだ。それに樺太へ來て以來、魚類(と云つても、多くは鱒だ)ばかりを喰はされ、夏分は牛肉は勿論豚肉さへないので、食が進まない。昨日から、野菜ばかりを料理するやうに宿へ頼んだ。

郵便物の不着が時々あるので困る。郵便局員等の怠慢または不注意を指摘すべき當局者も亦怠慢または不注意なのであらう。愛する者からのたよりが十通中二三本なくなつたなどは殊に僕に取つて苦痛だ。或人などは、鱒が澤山取れたので、函館へ時の價段を問ひ合はす電報を打つたが返事が來ないので、續けざまに二三回催促電報をかけた。さうすると、向ふから『ナニヨウジワカラヌ』といふ返電が來た。こちらからは最後のだけが行つたのであつた。

袷に羽織を着てゐるもの、ネルを着てゐるもの、單物を着てゐるもの、まち／＼であるのは、一日のうちに寒暖の變化が早いのを證する所以であらう。

## 其四十



七月三十一日。霧雨。午後曇。華氏最高七十三度、最低六十四度。

今月は蟹のあがらない月で、何處も殆ど全く仕事を休んだ。暇になると、職人などは兎角悪い考へを起して困る。使はれるもの同士の喧嘩口論やら、使ふものに對する不平やらが持ちあがり易い。昨夜、オタトモから一同を呼び寄せ、仲裁やら訓戒やら、今後の計畫などを云つて聽かした。オタトモは八月から波が荒く、船を出す望みがないので、例年の通りに雑漁者等は去つて了うし、罐詰業者等も工場を他に移したのだ。僕等も小屋だけは來年のにそつくりして置いた。温日同所でも熊が人家のあるところまで出て来て、寝てゐる人畜を驚かした。馬などは、熊の足跡を見ても立ちどころに悚くんでしまうのだ。

蟹はマオカで十五六錢する時、オタトモでは八錢であつたが、雑漁者が引きあげ出してから、十四五錢にのぼつた。満月の頃には、この動物は非常に痩せてしまう。その肉の一部が水になるのだ。また、朝取つたのと夕方取つたのとは中身の分量が違ふ。だから、漁師は、肉の減らない爲め、船にあげると直ぐ甲羅を剥がして置くのだ。蟹は豚と同様、棄てるところが少しもない。甲羅でも一匹分が二厘ばかりで肥料に賣れるから、製造場の薪代だけにはなる。本年は二萬箱、二十萬圓以上の仕事になつてゐるだらう。然し、無經驗の資本家が無經驗の職人を使つて、原料を罐詰に詰めさへすれば可いと云ふ間違つた考へで、蟹の洗ひ方、ゆで方、詰め方などをおろそかにし、中身を包むに用ゆべき硫酸紙の代りにパラペン紙をつかつたり、甚しきに至つては、半紙二枚を以つて代用したりなどしたものがあつたので、不出來な品や、腐敗罐を多く出した。また、わけも分らないで、ただ腐敗さへ防げば可いと思つて、防腐劑を混入したのもある。そんなことの爲めに、外國の貿易界で不評判を受けたのは事實だ。一工場で五六千の損失を來した所もある。然し、兎に角、樺太で最も有望な事業と見做されて來たから、來月から來年にかけて、蟹並に鮭鱒の罐詰製造所は随分殖える様子だ。

## 其四十一

八月一日。晴。華氏最高七十二度、最低五十八度。

さきに鮭の概算收穫高を報告して置いたが、實際のところは、十五六萬石らしい。この價を假りに百八十萬圓と見て、官廳に納めた税金七十四萬圓と各漁場で使ふ百名、二百名づつの漁夫賃金並に設備費などを差引けば、多大の損失こそあれ、利益はあつたとしても僅かな物だ。今回の旅行で各漁場をまはつて見たが、至るところ不漁不利の訴へが多いのに據つてもわかる。東海岸並に亞庭灣は鮭鱒が主で、鮭は兩方面を合せて西海岸で取れる十四分の一しかないが、西海岸でも、鮭不漁の爲め、その漁期後の鮭鱒で僅かに息を吹き返すことが出來た番屋もある。國境安別を根據とする熊谷漁場の如きは税金が日領のよりも十分ノ一安い露領にも二三ヶ所を有し、日露兩海の自由な融通を利用して、



巧みに密漁をも爲し得た番屋だが、本年は僅かに三四萬圓の儲けがあればいいかと云つてゐるに過ぎない。樺太領有以來、漁場を開いて金を拵へたものは殆ど一人もないと云つてもいい位だ。

昨年は樺太全體で鯨が二十萬石（それでも不漁だが）取れた。本年も、よしんば、それだけ取れたとしても、北海道の一小島利尻に於ける收穫高と大差はない。それを、樺太を買ひかぶつた官民が百萬石も取れるものと思つたから、すべての間違つた政策、すべての間違つた事業が生れて來たのだ。政府も入札漁業者等も、それを目當ての商人等も、すべてさう思つたのだ。政府は漁場入札の標準を高くしたし、入札者等は競つてそれをせり上げた。して、昨今不漁の聲までが價打ちをあげて來た。然し樺太漁業の實際は昨今のが常態であるのだ。わが國人は兎角新物を大切がり過ぎる。左程でもない樺太を賣の山でも得た様に持てはやすから、政府もその氣になつて、大事さうに魚族保護とか、山林保護とか、何だかだと六ヶしい法令を設けてしまつたのだが、魚族は樺太に定住してゐるものでもなければ、また山林にも碌な材木は得られない。若し出来ることなら魚族を取り盡し、山野を坊主にし、日本住人を自然に追つ拂つた上、アイノ人種の自由な生息地とし、意張りたがる軍人をして自由から意張りさして置くがいい。現長官のやつた様な、明確過ぎて窮窟な法律づめの政策は、實に愚の至りだ。

建網業者等の意氣込みを聴くと、若し刺網を公許せば、自分等と政府との間の約束並に入札の體面上、それだけの賠償金を政府から出させなければならぬ。北海道では、網と網の間隔が八十間ぐらゐるでも、その間に刺網を許してゐるが、樺太では、その間が二マイル、三マイルあつても、雜漁者の刺網を入れることが許されない様になつてゐる。政府は今やおのれの作つた法例の爲めに身づから苦しんでゐるのだ。その苦しむわけも表面上ではない。樺太廳の身代百九十萬圓のうち、七十四萬圓は建網業者等が納める税金だ。その他に山林、土地の拂ひ下げ金、雜漁雜業の税金などが六十萬圓あがる。あとは中央政府からの補助金五十萬圓だ。以上のかねで身上を持つて行く樺太廳が建網業者の肩を持つて、かの全體でたつた二萬五千圓程（一人拾圓）しか納めない雜漁者を眼中に置かず、事業本位の政策を確立して、人間よりも、をえらいものに見做すのは、一面に尤もな點もあらう。維新の頃、養豚事業がわけも分らず流行して薩摩でえらい物は第一に「豚殿、神さま、大山縣令」だといふ俗言があつた。今の樺太は第一に「鯨、番屋の親方、樺太長官」で地方官吏も人民もあつたものではない。昔、豚のから景氣が急に頓挫した如く、樺太を買ひ被つた結果が、現今の不景氣呼ばはりになり、また根柢から間違つてゐる漁業制度などになつてゐるのだ。その結果海岸の村落にして生魚を宿屋の膳に供することが出来ないところもあつた。

## 其四十二



今では、昨年から確定した建網本位の漁制があるから、建網主義で刺網を公許しないが、拵へた制度は何時にても變へることが出来る。變へて、刺網を許せば、政廳は何もわざわざ、雜漁者等を騒がす必要も、面倒も、またそれに對する申し譯の理窟をこねることも入らないのだ。制度を變へることが出来るに定つてゐる。刺網事件は、もう、政治上の問題であるから、樺太事情に通じた政客が之を帝國議會に持ち出して處分するより外はなからう。樺太の將來に大きな望を持たなくなつた僕等には、容易く解決が着く。乃ち、現在の漁制を（たとへ賠償金を建網業者に出しても）撤回し建網特許料金を遞減すると同時に、刺網をも公許し、魚族の保護（その實、現在でも、その効力はないこと）などいふ吝なことは云はず、山林濫伐の取締りをも（たとへ或程度までも）ゆるやかにし、なほ且中央政府からの補助金五十萬圓をも半減または全廢し、その代りに、樺太廳なる獨立商店の規模をすつと縮少するが可い。樺太放棄論者さへ出て來たくらゐだから、北海道廳の附屬にしても差つかへはなからう。漁期には随分多數の人が入り込んで來るが、實際の定住者は正味二萬人ばかり、それも漸々減じて行く新領地だ。さきに、土着さすことを主として論じたが、實際は土着永住する價値のない島だ。金のおがるだけ自由にあげさして、それを早く北海道なり、内地なりへ運ばしてしまふのが最も得策だらうが、それが出來難いとすれば、政廳の縮少と同時に、諸事業をもつと着實に、もつと小規模

にさすが可い。さうすれば最も組織が大きくて、實際の損得が分らない建網漁業は別として、鑛詰業は勿論、石炭採掘、砂金採集、並に牧畜製材も可なりやれるし、陸に大欸冬、木賊、海に昆布の採集をしても、相當な利益はあらう。山野を行けば、木賊を踏まなければ歩けないが、船から海の底を見れば、うす暗く昆布が一面に生えてゐる。アイノのアツシの原料かゆい草（いら草）のき如も、その織偉を織りて、種々新意匠の防寒、避暑の切れ地に代へることが出来るのだ。然し樺太には大野心を持つて這入り込んだものがまだまだ多いので、縮少的事業に氣が付いたものは少ない。餘り望みもありさうでない劣等石炭をも大々的に吹聴してゐるくらゐだ。官民ともにまだ鯨（または鮭鱒）に目がくれてゐる。だから、建網漁場の親方なるものは、二百名、三百名の漁師を驅使して、得々大名風を吹かし、派出巡查や公認補助醫等を取り込んで、我物顔に使つてゐる。以上は僕が今回の西海岸巡歴で得た考へだ。

## 其四十三

八月二日。晴。華氏最高七十七度、最低六十五度。

樺太その物も面白くなければ、樺太の事物も亦面白くない。官民ともに内地の喰ひつぶし物でなければ、殆ど全くがりがり／＼亡者だ。アイノや流刑露人等の生息地には適當だらうが、有望な日本人の永



住するところではない。石炭並に木材の質が悪いのは勿論、とくさも内地のよりはやはらか過ぎ、昆布も沃度分析目的としてはその分量少なく、海栗も水気が多いので、鑛詰にはその製造法を考へなければならぬし、おほぶきも亦穴が大きくて硬い。氣候も悪いし、飲料水も悪いし、土地その物もよくない。糠松・蝦夷松などいふ軟弱な山林（樺太はそれが多し）などでは、土地は木炭質でぼく／＼してゐるから、山火事がそれに燃え込むと、一尺も二尺も深く燻りながら廣がつて行く。たとひその上に雪が降りつもつても、火は下をむぐつて翌春まで續くことがある。露領時代には、三ヶ年もつづいたことがある。火事の越年などはこの島でなければ見られないことだ。僕等の旅行中、ナヨロ川奥の森林が七月八日から十四日まで燃えつゞき、五千餘町歩を延焼した。原因は、同所に入り込んだ露國獵師の失火であつたといふ。

樺太に於ける山火事の原因は、一般に入山獵師もしくは樵夫の過失でなければ、焼損木格安拂ひ下げの目的で、わざとその目的地に放火するのだとばかり思はれてゐたが、近頃發見された實見的學理に據ると、土壤に多量の燐を含んでゐるので、それが熱に觸れて獨り手に燃え出すこともあるのだ。現に、七月はいい天氣がつづいたので一日に三百ヶ所も燃え出した日があつた。また、單に山火事ばかりでなく、市街村落に火事が多かつた跡が至るところに残つてゐる。殊に官廳の焼け跡が目についた。眞岡支廳・名好郵便局等が焼けた跡を見た。思ふに寒國に慣れないものが、ストーブを無やみに

使ふから起ることだらう。ロスケ小屋の暖爐、ペチカの如きは、煉瓦を以てうまく出來た物で、朝一回、夕がた一回薪をはうり込めば一晝夜の間その熱は絶えない。日本人には、その構造が甘くやれないうさうだ。露人はすべて、その組み立てを手製でやるので、少しもセメントを用ゐてないのは、三年に一回取りくづして掃除をする爲めだ。日本人には、どうしてもその工合が甘く行かない。それを下手に用ゐると、直ぐ火事が出る。だから、假りにロスケ小屋に置かれてあるクスナイ出張所も名好郵便局も、ペチカはありながら、それを用ゐたことがないさうだ。

## 其四十四

八月三日。晴。華氏七十七度。

昨夜、樺太廳の前田第三部長の歓迎會が『あけぼの』にあつた。今回は民間側の發起でもあり、又漁場が暇になつたにも由り、第一部長の時よりも賑かであつた。然し宴會と云へば、必らず二次會、三次會をやるものであるかの様になつてゐる。漁場に関係あるものが多いから、マオカ人民は一體に金づかひが荒い。

中川一部長が豊原から電報をよこし東海岸巡視を五日頃から始める様通知して來たが、僕はここ二三日間事業上の用事があつてマオカ以外に出られないのは残念だ。その代り、二三日したら、第三部



長と共にマオカ以南のアイノ部落などを見に行くつもりだ。

昨今は昆布取りのほかに、北歸ほくきを取る時期で、クسنナイの北、ロクسنナイへは大分入り込んだものがあるさうだ。北海道の利尻島附近の海中では今盛んに海扇またてを取つてゐる。もとから海の底が鳴るといふ評判があつて、何のことか分らなかつたのは、それであつたのだ。海軍測量艦松江號が利尻の近海を走る時、何だか艦底に障るものがあつて、進行が自由にならないので、よく調べて見ると海扇の巢窟を發見した。この貝がかさなり合つて、幅三マイル、延長十マイル以上も連続してゐた。同艦は之を利尻島民に知らせてやつたが、實は、同島民はその以前から知つてゐたのだが、他の飛び入りものが是れを日あてに争うて這入つて來ない様に、秘密に捕獲してゐた。然し新聞紙によつて世上に云ひ傳へられたから、今では、その捕獲漁師が北海道本島から續々行つてゐる。それでもなか／＼取り切れなからうと思ふ。

樺太漁業は、その初め北海道の利尻島が根據であつた。利尻から海馬島もしくは東海岸に手を出したので、日領になるまでは、漁業は東海岸が盛んで、西海岸は餘り開けてゐなかつた。それが、日領になつてから、急にあべこべになつてしまつた。現今では、東海岸には宿屋のあるところが二三軒ださうだが、西海岸にはマオカを初めとし、ノダサン、トマリオロ、クسنナイ等、おの／＼二三軒から五六軒までの相當な旅館が維持されてゐる。船の便もこちらが割合に自由で、頻繁である。して、

その定住者または假住者等のうちには、日露戦争時代に海賊的奪掠をやつたものが多くある。海馬島に一時、漁業家の獨立政府が出來たことは、二六新聞に出た海馬島史にも書いてあつた筈だが、マオカにも、その小政府の落ち武者等が經營した日本俱樂部といふ獨立政治的團體があつた。その頃、露人並にアイノ人が多くゐたのだが、露人は義勇兵の一隊を組織して置きながら、それに兵糧を供給しなかつたので、その兵隊の爲めに却つて北へ追ひまくられてしまつた。そのあとを日本俱樂部が占領した。日本兵が到着したよりも以前のことである。

渠等並にその頃の船頭と漁業家とは丸で海賊であつたのだ。東海岸で失敗すれば、西海岸にまはり、西海岸に遺利がないと見ればまた東海岸をねらひ、帆船ならまだしもだが、一葉のほつ船かはさき、磯舟などを漕いで、深く敵地に入り込んだ大膽には驚くのほかはない。郡司大尉がカムチャツカで捕虜になつたのも、海賊に出かけた結果だ。カムチャツカのシーキングとかいふ會社の倉庫に、ラツコ、その他の高價な毛皮を澤山藏してあることを日本人はよく知つてゐたから、そこに最も近い占守島の大尉が先づそれに氣がついたのだが、つひに捕虜になつてしまつたところが、函館の或船持ちが第二回の冒險を企てたが、途中で難船に會つて這々の體で歸つて來た。して、また、第三回の冒險家が行つて、漸くその倉庫を切り破ることが出來たのだ。然し、歸途、小樽港へ這入つて來たので、悉く官憲の爲めに沒收されてしまつた。露國の領海へ早く行つたものは随分利益を得たさうだが。後



れたものは、大きな遺利が殆どないので、手當り次第に露人の家具を盗んだり、漁網を泥棒したりして来た。なかには、焼け半分に、海岸に積んである昆布を分捕りし、そのままでは嵩ばるので、沃度を分析するつもりで、灰にして運んで歸つたが樺太昆布には沃度分子が少いので、さつぱり馬鹿を見てしまつたのもある。山野天海氏も、その當時海賊船を仕立て僕のある旅館の亭主を船頭にして中ノトロ方面に行つて仕事をしたが、ガスの爲めに船の方向を失つて困つてゐると、直ぐへさきに大きな軍艦が現はれた。若し捕はれてはと驚きあわてたが、幸ひにもそれが我國の偵察艦であつたことがあつた。

東海岸の海豹島には、露獨兩國人組合の捕獸會社があつた。して、軍艦が来ていつもそれを保護してゐた。然しわが國人は大膽なもので、そんなことには頓着せず、その軍艦の見える範圍へ乗り込み、ラツコの密獵をやつてゐた。見つければ直ぐ機敏に逃げるのだが、大砲を打たれて逃げそこなつたのもあるさうだ。

## 其四十五

八月四日。晴。華氏七十四度。

樺太の宿屋は亂脈なものもある。或宿屋へ獨りの若い女が泊ると、夜に入て其處の番頭が忍込んで来た。それを逐ひ返すと、また明方宿の亭主が這入つて来た。女は怖れてその翌日轉宿した。それは別として、樺太の馬は小さいから五六十圓で買へるが、近所の牧草地に飼ひ放しにして置くと、いい加減の時獨りでこつ／＼歸つて来る。なか／＼可愛いものだ。その代り、さきに話して置いた通り、かの驛遞の馬が牝馬を追つかける途端、崖から落つこつて死んだ様なことも出来る。或家の牝馬（三歳）はよその牡馬と駢落をした。大抵その行方は想像されるから、その飼主が二三日のうちに三四里さきの牧場で發見し、飼ひ慣れたと同じ形のバケツをさし向けると、寄つては来たが、中に何も這入つてゐなかつたから、逃げて行つた。そこへ丁度その馬の親を引いて通りかかつたものがあるから、その親馬を連れ（馬はよく自分の親をおぼえてゐる）、バケツの中に燕麥を入れて近づき、それで漸く取り押へることが出来た。この牝馬はおとなしいので、僕等が乗つても左右することが出来る。驛遞の馬はどこのでも性が悪いので、客を落してすん／＼わが家へ歸つてしまふが、一般の馬は乗り手が來ない間は、決してそのとどめられた場所を去らないものだ。

マオカに水道工事が始まつた。その水源を見に、僕は今日山の奥へ這入つて見たが、道がないので中途から歸つて来た。途中で、芋を掘つてゐる女を見たので、それは馬鈴薯かと聴くと、いいや『五升芋です』と答へた。どちらでも同じではないか、いろんな草花を二十種以上も採集して來て、小學校、料理屋、玉突場などへ行つて、多くの人々に其名を尋ねて見たが、分つたのはさくの花、馬ゼ



り、七ツ葉、のみのふすま、樺太にんじん等、三四種で、きんぼうげらしいが、書物に照り合はずと違つてゐるといふ様な、樺太獨得の多いらしい。兎に角、高山植物が海岸近い山野にもあるのだ。

## 其四十六

八月五日。晴。華氏七十四度。

マオカの南端にある牧場地で牧畜をやつてゐる山下彦太郎といふ人を訪問した。氏は長らく漁業關係者であつたが、樺太政治の根本誤謬に愛想をつかしてから、隱者的に牧畜をやり出したのだ。牛が二十頭、豚が二十頭ばかりゐる。もつとも、これ限りではない。他の牧場をも持つてゐるのだ。この島の牧畜業も、餘り大規模にやり出すのは考へ物だ。といふのは、放牧時期は樂だが、越年六ヶ月間は飼ひ料を枯れ草にして貯へて置かなければならない。その上、獸舎を充分暖かにして凍死のおそれを防ぐ用意が必要だ。豚は本年から飼ひ初めたのだが、牛は肉（冬期を除いては、腐敗と需用不足との爲め、軍艦でも這入らないと殺さない）よりも乳を目的としてゐる。現在取れる乳で全體の飼養實費を出しながら、良い種を拵へて行く積りらしい。養鶏をも臆てやるさうだ。マオカで玉子は少いから八九錢する。クスンナイ以北では十錢から十二三錢だ。クスンナイで、そんなに儲かる玉子を。なぜ鶏を養つて儲けないのかと僕が尋ねたら、「犬めがめづらしいのでみんな取り食つてしまふから」と

答へたものがあつた。滿洲犬は糧を引かしたらおとなしいが、アイノヤギリヤークと同様、まだ開けてゐないのだらう。歸りに、山下氏は作つた畑を見せて呉れたが、馬鈴薯は一反五十俵、燕麥は一反四石取れるさうだ。その他に、胡瓜や南瓜は今花が咲いてゐる。また、豌豆、キヤベツ、茄子、大角豆、葱、夏大根、胡蘿蔔、牛蒡、三葉、菜などを作つてあつた。山を開墾して馬鈴薯を作つてある處は、臆て落葉松の造林にするさうだ。同松は五年目に一丈二尺ほど延びるものだ。山に野生覆盆子が澤山生えてゐた。

## 其四十七

八月六日。晴。

華氏七十三度。第三部長公用の爲め豊原へ急行、西海岸南部まはりは見合せとなつた。

同七日。朝、鳥渡雨、華氏七十二度。

同八日。午後より細雨、華氏六十五度。

アイノ部落の衛生視察の爲め、豊原から、本廳の船山病院長が來た。僕は、氏と共に、小警邏船翁丸に搭乘し、マオカから六里南のランドマリへ視察に行つた。土人戸數二十二、人口百七十。ここには、西海岸土人全體の總代をしてゐる川村初藏といふものがある。四十近いが、日本人とアイノの



合の子で種は日本人だ。樺太アイノにも随分日本人の血は早くから混じたらしい。四十、五十格恰の合の子が少くない。この川村氏に對して、別に東海岸に、その方の土人全體の總代バフンケイ（木村愛吉）といふのがある。これは純粹のアイノだが、川村氏よりも一層開けて、また一層立派にしてゐるさうだ。川村氏には、副總代とも云ふべき日本人、武内公平といふのが付いてゐる。これが始ど全く實際の世話役である。この人は愛知縣人で、明治三十七年に樺太へ渡り、土人に澤山の物品を貸しつけたが、それが取れないので歸ることも出來ず、且、幸ひに土人間に信用があるので、一身を忘れてアイノの爲めに盡力してゐる。今回の視察には、この人が來てゐたので僕等は多くの便利を得た。

僕等は川村氏の家に行き、そこへタランドマリのアイノ全體（そのうち、同村の巡查部長留任運動の爲め、請願に眞岡支廳に出たものを除く）を呼び寄せて健康診断を行つた。一體に身體の虚弱らしいのは劣等人種なる所以であらう。太つたものは少く、瘦せて骨が出てゐるのが多い。して、嚴密に云へば、トラホームに罹つてゐないものはない。特に目に立つのは、船山氏も東海岸で見たことが少いセムシがあつて、而もさういふものには横ツ腹もしくは腰のあたりに穴が出來て、そこから膿が出てゐることだ。次に、ヒゼンが多い。この部落は一昨年頃殆ど全體にこの病が廣がつてゐたが、壓制的に大治療を行つた爲め、今では、それでも減じて來たさうだ。肺結核と梅毒とは少い。

北海道のアイノ學者バチエラー氏は北海道土人研究の結果、アイノ人種には固有の梅毒並に肺結核

が多いのを事實と断定し、樺太アイノも必ずさうだらうからと、樺太廳に注意したさうだ。ところが、樺太で、東海岸土人取調べの上だけでは、白癬とトラホームとはあるが、梅毒も結核も殆どない。然かし一時北海道へ行つてゐた土人の部落（さきに僕が行つた）が西海岸のチラフナイボにあるが、トマリオロの公醫が出張の上取調べたのに據ると、診断百十一名のうち、九十二名までが不健康状態で、第一に結核性、第二に梅毒、第三にヒゼンが多い。全體アイノ婦人は優等人種たるシヤモ（日本人）に愛せられるを名譽とする。して、北海道アイノは樺太アイノよりも日本人に接する機會が多かつた。之を理由として、梅毒は北海道でもアイノ固有の病氣でなく、日本人中の劣等者、即ち土方、漁師、兵士などから傳染したのではないかと推斷する人々もある。アイノに限らず、現に、豊原に残留露國人で評判娘を二人持つてゐたのが、婿を貰ふことが出來ないので困ると云つてゐたうち、軍政時代のことであつたから、年頃の姉の方が或日本軍人に關係し、激烈な梅毒を受けてしまつた實例もある。して肺結核の如きは、梅毒から來ることもあるのだ。然しまた充分の斷言は出來まい。梅毒の遺傳を證する徴候はまだ見たことはあつても少いさうだ。然し船山氏は明日から北方の各部落を巡るから、その取調べの結果はいづれとも判定されるだらう。兎に角このタランドマリ部落では梅毒が少い。して一見梅毒と見えるのは、四五名、皆婦人だ。

## 其四十九



アイノ家屋は不潔な上に、空氣の流通が悪く、光線の取り方には全く不注意だ。窓はたつた一つしかないのに。それを迷信の爲めに滅多にあけないで、その側に小さい穴をうがつてあつた時代もある。それも、雪が降り出すと、塞つてしまう。例の入り口を締めると、晝でも薄暗い、光線不足と燃火の煙との爲めトラホームを引起すは無論の事だ。營養不充分、空氣の腐敗、周圍の不潔、梅毒性、血族結婚、飲酒等の爲め、身體は虚弱になつて、肺結核を起すのも亦自然の事だ。僕等の前に出て來たのは、病人でもまだ動けるから可かつたが、出て來られない者が四五名あるので、各々其家に就いて見てやると、足の骨が痛んで立てない者もあるし、老衰の爲めに小供の如く泣きわめいて居るものもある。然ういふのは總てメノコだ。女には、鳥渡美人もあるし露國人の血が入つてゐると見える娘も一人ある。然し、大體では、男子よりも女子の方が一層虚弱だ。劣等人種がますます劣等になつて行く證據であらう。竹内氏の言に據ると、死ぬ時、瘦せ衰へて、咳をしながら、白い唾を吐き、偶々赤い血が混ることがあるさうだ。

タランドマリのアイノは住居並に風俗も日本化して居るのが多い。僕等が話すことを善く解して居るし、二三歳の小供でも、目を見て貰ふ時、怖れて泣くのに「痛い、痛い」と云つて居る。アイノは多く日本流の姓名を附與されて居るが、姓だけが日本で、名はアイノ流なものもある。殊に可笑しいのは、女で木村オチンコといふのがある。二三回目診察を受けた男の胸に血のにじんだ跡が濕山ある

ので、どうしたのかと聽いて見ると、アイノの習慣として、肩の凝る時、胸に水をつけて指さきを以てやたらにつめるのださうだ。跡がつくほどにつめるのであるから。肩の凝りをさうして他方に散らす神経作用らしい。

同部落で近頃太刀と鐔とを掘り出したが、太刀は丸で腐つてゐたさうだ。本年五月には、ナヨロ川のほとりで鎧太刀、なぎなた等を掘つた、この方はどうしても七十餘年以前だらうと定められたが、誰れのか分らない。土人中の古老の記憶に據ると、日本人（普通の漁夫）等が初めてその邊へ渡つたのは五十餘年前のことで、其時有名な武士が二三名あつた。鎧の所有者はそれよりも以前のことだ。或大將があつて、其家屋が焼けた儘になつてゐたが其焼跡から出て來たのだ。タランドマリの鐔なども眞岡支廳に納めて取調べを受けて居るさうだ。

海馬の胃囊といふのを茲で初めて見たが、一斗以上の流動物を盛ることが出来る。アイノはこれに海馬の油を入れて置き、何様な食物にもそれをかけて喰ふのだ。

僕等は午後三時半にマオカへ歸つた。この行には、三津木春影氏の親戚に當るといふ人が隨行してゐた。

其四十九



八月九日。雨。華氏六十四度。

昨日の一行と共に、翁丸に乗り、マオカから一里南のクメコマイ部落へ行つた。此處の土人の爲めに許可してある漁場は、東京の日向輝武氏の名を以つて引き受けてゐるものであるが、もとは此處の土人總代山本實兵衛といふのが番屋であつたのだ。實兵衛が『まかなひ取り』(漁)に中ノトロへ行つて留守なので、僕等は田澤モトキといふ土人家にアイノを招集した。十七戸、九十五名のうち、留守があるので、老若男女四十五六しか集らなかつた。女の名にチャコ、ユリコ、レキシマ、シバラレマなどいふのがある。同部落には、健康體が多く、トラホームやヒゼンも少い。然し全體に虚弱質になつてゐるのは、劣等人種の免かれ得ないところだらう。婦人の胸廓、背の幅が廣いのは、とても日本人種の及びもつかない點だし、齒ぐきも日本人の様の圓形でなく、角括弧形に固く、齒も亦短くつかつきりしてゐるが、それが何れもその儘にしほれて行くのは實にみじめだ。めのこでも毛深くつて、背中、胸、腕までが目立つ程の毛を持つてゐるのがある。して、男女ともに眉毛が濃く、その間並にそれと目の間が接近してゐる肩の凝りを直す爲めマキリでかきむしつた跡に入れ墨の墨が残つてゐる老人があれば、白癩の爲め頭の禿げた壯年者數名ある。烈しい肋膜炎の爲めに心臟の位置が片寄つてしまつたのや、肺結核または脊髄病で、脊骨が飛び出たり、手の骨が曲つたりしたのや、佝僂病で全く脊が延びないのやもある。して、重大な病氣はヤツぱり女の方に多い。

立てない病人等をその家々に就いて見舞ふ時、案内をするアイノの一人に僕はにを(學名、えぞにふ)を指さし、何といふかと聽けば、しうきなど説明した。僕はさくとにをとを取つ違へてゐたので、土人の喰ふのはそれかと再び聽くと、いくらアイノでもそんな物は喰はないと憤慨した様子だ。然しよく念を推すと、渠等のおもに食用とするのはさく(アイノ語、はら)の方でしうきな(しよツきなども云ふのだらう)のにもあまにをなら喰ふさうだ。實兵衛の留守宅を訪問した時、また百合の根を糸に通して澤山爐の上に乾してゐるのを見た。

アイノが年代を數へる仕方は單純なもので、親の時、そのまた親の時、親の親のそのまた親の時といふ様に同種族の口碑をつたへて行くのだ。同時代のもでも、自分よりさきに生れたとか、自分よりも後だとか云つて、大體の年齢を示めすだけで、渠等は、青年男女の外は、自分の年を確かに知つてゐるものがない。一老人の如きは、年を問はれて、自分は知らないが、お役所の帳面についてゐるだらうと云つてゐた。

### 其五十

八月十日。晴。華氏六十二度。

樺太の花植物を擧げて見ると、四月末から咲くのに福壽草、やちぶきなどがある。五月に這入つて、



えんごさく、きばなのあまな、ねこのめ草、ふき、水芭蕉、一りん草、二りん草、ひめいちげ。六月になつて、こけ桃、ごぜんたちばな、りんね草（この三種は樺太獨得とも云つて可い）、わすれた草、すずらん（この種もわざ／＼ここから内地へ送られる）、山芍薬、石竹、金ぼうげ、えぞかんざう、樺太にんじん、しょうぶ、ひめすゐば、せんだい萩、たかねばら、黒ゆり、いそつじ、熊谷草、あつもあり草。七月にはえぞにふ（さく）野豌豆、ぶし、鹿ぎく、濱なす、白よもぎ、おほいたどり、おほやまふすま、ばいけい草、車ゆり、山ゆり、野あやめ、北見はたぎを、裏白きんばい、ふうらふ、からまつ草、おほばだいたん、ぼうな、おほばしもつけ草（俗に誰が袖）、白玉草、やなぎらん、こめがや、草ふじ、あざみ（えがのきつねあざみ）くろーばー、七ツ葉、金みづひき、くかい草（虎の尾）、等だ。以上は、今、マオカに来てゐる菅野技師の調べに、僕の見聞と採集とを参考して書き出したので。樺太で特に発見された草花が幾種類もあるさうだが、まだ命名されず、札幌農科大學で研究中だ。

## 其五十一

八月十一日。晴。

樺太の漁業家には髻を生やしてゐるものが割合に多い。聽いて見ると、髻の時代といふのがあつたのださうだ。髻がなければ、露國人には勿論、アイノ人にも馬鹿にされたからである。して、アイノ

や露人が退いてわが國人がそれに代はる時代には、随分滑稽なことや悲惨なことがあつた。一ごけを買ふのに、數日前から申し込んだり、官等順で行つたりして、而も一回數分間に五兩や十兩を取られたのもその時代だ、數千金を懐中しながらも、衣食住の不自由に苦しみ、木の根を枕として夜を明し、罐詰の明き穀に數十人が争つて一條の湧き水を受けて飲んだのもその時代だ、もう金も命も入らないから、一晩でもゆつくり葦小屋に寝て見たいと思ふ人々があつたのも、その時代だ。して、小屋と云つても、初めは土に穴を深く掘つて、その上に葦をかぶせてゐたのだが、それが少し發達すると、半ば穴に、半ばかこひになり、また發達して、今度は全く穴を脱し、から傘を半ばすぼめた様な葦小屋になり、更らにまた發達して、家根を有する小屋となり、板小屋となつた。それを見てゐたものには、僅かの時日に、人類の原始時代から現代の生活に移り變はる状態を見た様な氣がしたさうだ。以上はおもに大泊に於ける状態であるが、マオカでも、さきに報じた日本俱樂部成立時代にはさうであつた。して、明治三十八年、熊谷事務長官の婿に當る若學士が眞岡民政支長として都丸に乗つて來たるや、その一味徒黨と共に、種々の野心、隱謀とを授けられて上陸した。妾をつれて來たのもあれば、御用商人をつれて來たのもあるし、料理屋、ごけ屋、女郎屋などを開始するものも亦一緒にやつて來た。して、そこには無學者流ばかりが多かつたから、官吏にさへ頼めば、何でも出来るものと信じ、來住の漁業家や商人が官憲に運ぶ賄賂や物品はおびただしいものであつた。一官署の小使でさへ



月五十圓、百圓の収入があつたさうだ。官民ともに、金は湧き出て来るものであるかの様に、遊樂に日もこれ足らずといふあり様であつた。然し軍政時代の勢ひがまだなか／＼抜けずしてゐたから、土木課長が一夜二十兩の約束でごけ屋に飲んでゐるところへ戀敵の憲兵軍曹が這入つて来て、『この生意氣な奴め、斬り殺せ』といふ騒ぎに、課長は取るものも取り敢えず、這ふ／＼の體で、裏口から逃出した滑稽もある。

支廳長は腦病持ちで、何の役にも立たなかつたので、その次席某に實權があつた。して、その某は終日、終夜、丸萬といふ料理屋に入りびたり、官廳の事務をそこで執つてゐたのだ。この時代をマオカの暗黒時代と云ふのだ。ところが、蕙小屋が板圍ひとなり、板小屋がまた五間間口、八十一坪の人家となるに従つて、ずん／＼秩序がついて來たのである。

## 其五十二

八月十二日。晴。

マオカの市中で石油が出るのを發見し、大評判になつたが、分析の結果がまだ分らないから、實際の見込みも亦分らない。然し、西海岸アラコイから南方トコンボに至る沿岸一帯は、岩石層が南北一直線に亘り、その岩石の間には、青色の石油脈が現出してゐるさうだ。かういふ兆候は南方に多いさうだ。

うだが、それが北方の名好地方までも同一系で及んでゐるだらうといふ説がある。

ついでに云ふ、石炭はトマリオロヤブスタキの官礦以外にも、メナベツ川流域の面積九十四萬坪は千引石松、外二名に、同じく五十萬三千餘坪は小澤某に、ノポリボ附近二十六萬坪は山本某、外二名に、セルトナ流域六十八萬坪は大阪の高田實に、いづれも許可された。安別の熊谷漁場でも、その附近を願ひ出で、自家用並に自家の船舶用を掘るつもりださうだ。

## 其五十三

八月十三日。晴。

東岸海の幌内川流域には、ギリヤーク人七十五名、オロチヨン人二百五十五名、サンダース二名、トングース五名がある。計六十五戸、人口三百三十七名だ。狭い小舎は建ててゐるが、殆ど一定の住所はない。漁期には川口に出て鮭、鱒を取つてゐるが、秋になると、奥へ這入つて、貂取り、狐取りをするのだ。ギリヤーク人は、僕も露領で見たから知つてゐるが、男子は容貌陰險、短い辮髪でなければ、前額に四寸ぐらゐの長髪を貯へ、鬚鬚は長く威風堂々と云つても可い。女子は面圓く扁平で、鬢二すぢを垂らしてゐるか、然らざれば、後頭部に結髪で、大きな耳輪を箝めてゐる。して、オロチヨン人は男子の髪が短く、鬚なく、男女共に圓面扁平ださうだ。男子には、五分刈りがあり、女子に



辨髪がある。渠等はすべて血族結婚をしなければならぬ状態にあるから、畸形兒や病身者が多い。残留露人のうちでも、女が足りないのので、男子四名で一妻を共有してゐるのがある。

オロチヨン人の女は馴鹿(トナカヒ)と交換されるので、馴鹿が多いただけ女の價打があるのだ。そのまた裁判が面白い。或男が他の男の妻を誤つて銃殺したが、それが酋長のさばきで、かう決着した。銃殺者は、銃殺された女が結婚の時受けた馴鹿の數を被害者の夫に與へ、それと同時に銃殺者の妻をも被害者の夫に與へたのだ。この頃また悲惨なことがあつた。オロチヨンの酋長ミキポリといふのが、妻を出して、ナポリといふ少女を入れやうとし、酒の勢を以つて、妻に相談した。妻は聽かないので、酋長は妻を船に乗せて幌内川の眞中に浮べ、離縁を承知しないなら、かうするぞと、脅迫的に妻を水中に投げた。無論、殺す氣ではなかつたのだが、流れが激しかつたので、再び引きあげてやることが出来なかつた、酋長も俄かにそこで酔ひが醒め、身を投じて浮き沈む妻を助けに行つたが、力が盡きて、二人とも死んでしまつた。少女ナポリも亦それを聽いて殉死した。

## 其五十四

八月十四日。晴。

トマリオロに泊つてゐる時、宿の天井や壁から黒い小蟲がばたり／＼と落ち來たり、それが何時の間にか蒲團の白い敷布のまわりに一面に集つてゐるので、僕は實に氣味が悪かつた。毛蟲だが、別に刺すこともなく、鳥渡でもさはると、くる／＼と圓まつて黄いろい汁を出す。ところが、それは非常な害蟲ださうで、葦の様な植物のとがり葉を喰ひ盡す奴だ。早く退治してしまはないと、樺太農業に大切な燕麥、ライ麥等をなくなして了うだらうといふ問題が、近頃起つて來た。トマリオロでは漸々なくなつたと云ふがそれは地下に喰ひ込んで行つたので、この蟲は地下三尺までも這入つて行くさうだ。して、マオカ南部に至ると、三里にも四里にも渡つて、その害跡が現はれてゐる處がある。北海道で之を地蠶または夜盜虫と云ひ、これが跋扈を防ぐには、溝を掘り、そこへ石油を流して置くのだ。するとそこに落ちて死んでしまふ。

僕は今日急に内地へ向はなければならなくなつた。それも、事業が進むと共に、難局になつて來たからだ。或用件を控へて大禮丸に乗つた。然し、留守中、事業進行の用意だけはして來た。若し暫く歸れない様なことがあつたら、一時、樺太通信は中止するが、越年時期には再び渡航するから、樺太越年日記を書くことにしたい。

大禮丸では、三名の漁業家が今年の引き揚げをして小樽もしくは函館へ歸るのに同船した。いづれも僕が旅行中に知り合ひになつた人々で、今年は儲けた者もあれば損であつた者もあるが、規模が大きい漁業者だけに、いづれも損益が眼中にない様な態度である。一等室で話しがはづんでゐるうち、



船長が東海岸海豹島の話をし出した。同島は、今、臘肭臍が住んでゐるが、禁獵だから随分繁殖し、近頃の報告によると、僅か周圍十二丁の同島に、千八百五十頭ゐる。監視の官吏が派遣されてゐて、その密獵を防ぎ、獸兒の發育を助けてゐる。随分澤山になつて來たので、もう入札か、何かで請け負はし、捕獲しても可い頃ださうだ。本年、その島を去るものが、來年になつて皆歸つて來るか、どうだか分らない。試験の爲め、先年耳を切つて置いたが、監視所から遠目鏡で見ると、實際にその耳が切れたのが來てゐるか、どうかも分らないのだ。この獸類の習慣として、牡一匹で牝を四五頭もしくはそれ以上も保護する。して、その牡の勢力範圍に入り來つて、牝を犯さうとするものがあれば、牡はその敵が自分の子であつても、何でもかまはず、喰ひ殺して了ふほど神経が過敏になるのだ。この頃では、海に這入つて餌を求めるところをさへしないで、その身が痩せこけて行くのも知らないでゐるさうだ。中には、牝二十頭以上を牡三四頭で共有保護してゐるものもあるが、そこへ獨身者のあばれ者が飛び込み、牝を喰へ行かうとすると、それと奪ひ合ひが始まり、激烈な争ひになると、その間に齒がたを深く受ける牝が死んでしまうことがある。

臘肭臍の群居してゐる一間ほど近くまでも人が行けるが、うなられるので随分恐ろしいさうだ。大禮丸船長の撮影した寫眞を二枚貰つたが、同獸群居の眞中に大分空地があつて、そこに大きな別な獸が寝ころんで居るのは海馬（とど）だ。海馬は同島に五十頭ばかりゐるさうだが、臘肭臍をいぢめ抜

くので、大害物と思はれてゐる。監視者は折さへあらば銃殺するのだ。陸上でもぼう／＼とうなり猛つて意張るので、臘肭臍等は恐れてその側へ寄り付かない。海馬も、臘肭臍も、寒くなればゐなくなつて了ふのだが、その時節にはまた海豹（アザラシ）の群がやつて來てこの島を占領するのだ。

## 樺太の話

### 日露の國境

わが國が陸つづきで他國と境してゐるのは、樺太島の北緯五十度に於てばかりである。樺太は北へ行くほど山が高くなり、その山が火山的にさきが尖つてゐる。安別といふのが日本領に於ける最北の地名だ。昔の地圖で、トルストイの鼻となつてゐる安別の岬が海岸を日露の兩領に分けてゐる。岬と云つても、鳥渡した山で、その絶頂には、國境標が建ててある。そこへ行くには、切り崖の様な山腹に細い道を切り開いたのを登らなければならぬ。それがまた急な道で、右に折れ、左にまがり、丸で稻妻の通つた跡の様だ。して、それを登ると、外國だと思へば、僕等は何となく物凄じい感じがした。

國境標には柵をめぐらし、花崗石の低い標がある。して、南面には菊の紋、北面には鷲を刻してある。寫眞師をつれてゐたから、僕等はそれに腰かけて撮影した。そこから、うしろの山を望むと、林空と云つて、山の林を五六間幅に切り倒し、國境の線としたのが、一直線に東の方へ走つてゐる。そ



の直線は、山の高低と谷の有無とをかまはず走つてゐるのであるから、それを望見すると、實に氣持ちが好かつた。僕等はそこで雨に降られたが、それが日本の雨か露西亞の雨かといふ様な疑問が起つた。黒百合が澤山生えてゐるところだ。

その國境の鼻から臨むと露領の方へ十餘丁ばかり延びた低い草山が、綺麗な砂濱をいだいて、彎形に突出して、富士形に隆起してゐる。それをわが國人はピレオ富士と稱する。國境から一里半行くと、ピレオといふ港があり、ギリヤークといふ劣等人種の一部落並に露國の有名な製材會社がある。露國では、國境を踏査する時、そこが五十度に當ると思つてゐたのだが、わが國の馬鹿正直な學者等はそれに反對して、一里半も手前のところを選定したので。その露人と安別の漁場とは、殆ど公然の秘密を以つて、旅行券なしに相往來してゐる。大竹氏の關係ある漁場が日露兩域に渡つて三四ヶ所あるから、密漁をやりながらも、わが國の巡邏船が來たから露領に逃げ、露國の官船が來たら日領に隠れた時代があつたといふわけだ。

### 火事の越年

樺太の山火事は一種特別だ。船から見ても、全島至るところ、一度ならず、二度ならずの火事があつた跡でない山はない。大木は一里も二里も奥へ入らなければ見られない。一度山火事があると、その存跡に先づ白樺が出来る。それが育つと、そのかげに椴松や蝦夷松の芽生えが出る。して、草木の生の競争上、それらの松の大きくなるには、樺はその繁殖を停止してしまう。それがまた焼けると、ばらやいちごや羊齒類の坊主山になるが、そこに少しでも熊笹の根があると、すべてがこの笹の繁殖の爲めに征服されてしまう。だから、熊笹は森林保護の上には大害物になつてゐる。たとへ、火事はなくても、また、樺太山林の地盤が固くないから、如何な大木でも、濫伐の結果、あたりに相持ちの木がなくなると、風の爲めに根からおびえてしまつたり、さなくば、幹が弱い部分から折れてしまつたりするのだ。

同島に於ける山火事の原因は、一般に入山獵師もしくは樵夫の過失でなければ、焼損木格安拂ひ下げの目的で、わざ／＼その目的地に放火するのだとばかり思はれてゐたが、近頃發見された實見學理に據ると、土壤に多量の燐が含まれてゐるので、それが太陽の熱に觸れて獨り手に燃え出すこともあるさうだ。四十二年の七月はいい天氣が続いたので。一日に三百箇所も燃え出したことがある。して一週間や二週間つづくことは珍らしくない。或は二月も三月も焼けつづき、或は數十万里を焼き拂ひ、その海岸を通る帆船の上に一晩にして二三寸の灰が積つたこともあるさうだ。ナヨロ川奥の森林が、四十二年七月八日から十四日まで燃えつづき、五千餘町歩に延焼した。大きい火事になると、もう、手のつけやうがないので雨や雪の爲め自然に消えるのを待つのだ。ちひさいのなら、山林を切



り倒して、そこにくひ止めることも出来る。

椴松や蝦夷松の様な山林（それがまた多い）の地盤は、眞土の様なもの丸でない。木炭質だ。いづつからかの木の葉や枝や枯れ木などが積み重つて、それがただ腐つてゐるだけの程度であつて、僕等が内地で見る山の土とまではなつてゐない。赤い色の木朽れ土で、ぼく／＼してゐる。それが何尺も、何尺も重つてゐるのだ。だから、一旦、山火事となると、立ち木が焼けるばかりでなく、その土も共に燃えて行く。而もそれが一尺も二尺も地下に燃え込むのであるから、地下を火事はくすぶりながら廣がつて行き、たとへ雪がその上に降りつもつても、火は下をむぐつて翌春まで續くことがある。露領時代には、三ヶ年もつづいたのがある。火事の越年などは、この島でなければ、見られないことだ。

### 鯨の群衆

樺太廳の生命は鯨にある。人間よりも鯨が大事にされてゐるのである。つまり、この群衆魚がなければ、樺太の獨立經濟が成り立たないのだ。政廳毎年の身代百九十萬圓のうち、八十五萬圓（殆ど全體の半分）は鯨の建網税からあがる。然し實際の收穫を云へば、四十二年の豫期は二十萬石であつたが、十二萬石内外しか取れなかつた。不漁の聲が高いのもつともであつた。金目にしてたつた百四五十萬圓しかなかつた。それをおもに三四十ヶ所の漁場持ちが分けるのだが、鯨はおもに西海岸で取

れるのであつて、東海岸は鮭鱒を主としてゐる。一漁場で二三萬圓の税を毎年納めるところもあるが、その漁期と云つたら、たつた三ヶ月間で三月十五から六月十五日を以つて限りとしてゐる。而もその短日月に二度も三度も鯨の群衆があればいいが、さううまくは行かない。一漁場、乃ち、一哩なり二哩なり三哩なりの海岸を限つて、高い税金のもとに許可された建網といふ一種の網を張つて待つてゐるところを、鯨が全く素通りしてしまふこともある。その代り一網に一回這入りさへすれば、その年の何十萬圓といふ仕事は終るのである。それも僅かに一時間か二時間のこと過ぎない。

漁場の主人、乃ち、どこの料理屋にも争つて歓迎され、且、アイノ少女が戀の最大理想とする番屋の親方なるものは、毎年、その期間に、小は四五萬圓より大は三四十萬圓の資金を運轉し、汽船の二三隻も備へてゐるのである。樺太日領の定住人口は二萬餘りしかないが、漁期に至ると、いつも七八萬に増加し、不斷はアイノか驛遞かが、それも、通るか通らないくらゐの海岸にも、臨時の村落もしくは都會が出来るのだ。して番屋の親方は五六から三四百名の漁夫を驅使し、自分は自家の旗じるしを立つた立派な建て物に住まひ、勝手氣儘な贅澤三昧をして、渠等に立てまつられてゐる。丸で大名の様だ。都會で成功の見込みがなくなつたら、僕等も寧ろあんな僻地であんなに威張つて見るのも面白からうと思はれた。多くは小樽、函館、新潟などの資本家だが、金の威光にまかして、密獵監視の出張巡查や政廳指定の公醫などをも自分の手したの如く使ひまはしてゐる。



渠等は、然し、如何に人間には威張つても、鯨にはあたまがあらぬ。その漁場を素通りされたら、その高價な設備と多大の意氣込みとが無になつてしまふからである。鯨は決して單獨に來たるものではない。必らず大群を爲してやつて來る。いつも沖合にゐるものがなぜその期に限り海岸近く群來するかといふに、淺瀬の海草に放卵する爲めだ。牡鯨が海藻に放卵すると、牡鯨がその跡へ行つて白子をかける。すると、如何に廣い海面でも、そこらあたりが一面に黄白色に變じてしまふ。之を放卵濟みと云ふ。この時が魚の本能的に安心する時であるのに、海水の黄白混濁に由つて魚が眼光を鈍らす爲め、驚いてその周圍を狂奔する。ここに建網、刺網の可否論が起るのである。政府は建網本位を取つて、刺網は魚族の保護によくないと主張してゐるのだが、刺網論者に云はすと、建網こそ却つて魚族の繁殖を妨げるわけになる。と云ふのは、建網の手網がミゴ繩製であるから、海中にあつて光澤を放つ。魚はそれに怒れてまだ放卵しないうちに、方向を轉じて散逸しやうとして、それが悉く常設の建網に這入つてしまふ。然し、刺網は放卵後の狂奔に乗じて投入されるものであるから、その魚は獲つても、繁殖に必要な卵は取らないといふわけだ。この問題は、今では、實際の魚族保護を目的としての議論ではなく、建網業者と雜漁者との間の利害的、政治的問題になつてゐて、つまり、金力があつて、運動に巧みなものが勝つてゐるわけだ。

## 海賊跋扈時代

樺太に於けるわが國人の漁業は、その初め、北海道の利尻島が根據であつた。利尻は北海道の西北端、宗谷海峡のはづれにあり、野心ある漁夫等のさらに地を窺ふのにいい地勢を持つて居た。して初めてわが國人に占領された露領は樺太西海岸がはの海馬島だ。ちひさい島だが、そこに一時漁業家の一獨立政府が開られた。今は小樽で落ちぶれてゐる志田某氏がその島王たる權威を振つてゐた。

然し樺太が日領になるまでは、西海岸は餘りひらけてゐなかつたので、露人はおもに東海岸に手を盡してゐたらしい。それが急にあべこべになつたのだ。現今では、東海岸には宿屋のあるところが二三軒所よりないさうだが、西海岸にはマオカを初めとし、ノグサン、トマリオロ、クスンナイ等、おのおの二三軒から五六軒の相當な旅館が維持されてゐる。して、船の便も亦こちらの方が割合に自由で、頻繁だ。然しそれがさうでなかつた日露戦争時代には、幾多の賊船が出されて、海馬島でなければ、東海岸へまはつたものだ。して遺利がなくなつた頃、漸く西海岸に目を付け出した。マオカにも、海馬島政府の落ち武者等が集つて、一小政府を建設した。それを日本俱樂部といふ。その頃、露人並にアイノ人がそこに多くゐたのだが、露人は、わが國人の侵入を防ぐ爲め、義勇兵の一隊を組織して置きながら、それに兵糧を供給することが出来なくなつたので、その兵隊の爲めに却つて北方へ追ひ捲られてしまつた。そのあとを日本俱樂部員が占領した。日本兵が到着するよりも以前のことである。

渠等並にその頃の船頭と漁業家とは、つまり、海賊であつたのだ。東海岸で失敗すれば西海岸にま



はり、西海岸に遺利がないと見れば再び東海岸をうろつき、帆船ならまだしも、一葉のほつ船、かはさき、磯舟などを漕いで、深く敵地に入り込んだ大膽には驚くほかはない。群司大尉がカムチャツカで捕虜になつたのも、海賊に出かけた失敗の結果だ。カムチャツカに於けるシーキング會社の倉庫に、ラツコ、その他高價な毛皮を澤山藏してあることは、わが國人の兼てよく知つてゐたところであるから、そこに最も近い占守島の大尉が先づそれに氣付いたと思はれるのは自然のことでないか？然しそれは捕虜になつて失敗に終つた。ところが、函館の或船持ちが第二回の冒険を企てた。それは途中で暴風に遭遇し、難船をして、いのちからく歸つて來た。してまた第三回の冒険家某が行つて、漸くその寶の倉庫を開らくことが出來たのだが、渠は得意の餘り、公公然として船を小樽の港につけたから、そのすべての勝利品は密獵品と見爲され、官憲の爲めに悉沒收されてしまつた。

露國の領海へ早く行つたものは、ひそかに大利を占めたさうだが、後れて行つたものは、大きな遺利は殆ど全くなかつたので、手當り次第に露人の家具を盗んだり、漁網を泥棒したりした。なかに、焼け半分に海岸に積んである昆布を分捕し、そのままでは嵩張るので、歸國の後沃度を分析さすつもりで、わざ／＼灰にしてから運んで歸つた。然し樺太の昆希には沃度分が少いので、さつぱり馬鹿を見てしまつた。僕のとまつてゐた旅館の主人なども海賊船の船頭であつたさうで、或時、中ノト岬方面に行つて仕事をしたが、ガスの爲めに船の方向を失つてしまつて、困つた。まご／＼してゐ

るうち、自分の船の直ぐさきに大きな軍艦が現はれた。敵艦に相違はないから、捕はれてはと驚きあわてたが、それが幸ひにもわが國の偵察艦であつた。その時のあわて方ツたらなかつたと、今でも主人がその同行者の一人にからかはれるのを、僕は目の前で聞いたことがある。

随分滑稽もあつたらうが、わが國人の大膽なのに、僕も頼母しく思ふのだ。東海岸の海豹島には、露獨兩國人組合の捕獸會社があつた。して軍艦が來て、いつもそれを保護してゐた。然し、それにも拘らず、わが國人はその監視艦に見える範圍までも乗り込んで行つて、ラツコや臘腸臍の密獵をやつてゐた。見つければ直ぐ敏活に逃るのだが、大砲を打たれて逃げそこなつたのもあるさうだ。

### 樺太の殘留露人

露西亞人の孤立的に日領に残つてゐるのは、ところどころにあるらしい。女が少いので、四名の男子が一妻を共有してゐるものもある。然し、西海岸の北方ナシといふところには、殘留露人の十一家族、六七十名の一部落がある。渠等は露領へ引きあげても、生活に變りはなからうから、居慣れたところにとどまる方がいいと云つてゐるが、歸化を許されないの、わが官憲はその處分法に困つてゐる。渠等はすべて兇狀持ちの流刑者並にその子供で、無學文盲のどん百姓だ。すべて、ロスケ小屋と稱する横丸太建ての家に住み、ベチカといふ釜土兼用の暖爐を用ゐ、大抵は食堂も、寢室も、應接間も同



じ室を使ふのだ。男子は靴を穿くが、婦人並に子供はいつも跣足で山野を往來する。雨が降つてもさうだ。露領時代には、寺子屋ぐらゐの學校もあつたし、教會もあつたが、今はそれらがなくなり、且教會堂がナヤン支應になつてゐる。

この部落には、露人と云つても純粹露人の外にアルメニヤ人、ポーランド人などもゐる。渠等は太古の民と同様、分業の法を知らないのではないが、行ふことが出來ず、獨りで牧畜もやれば耕作もやり、バタも造ればパンも製する。男女共に酒は強いのを好み、占領當時の如きは、大道にぶつつぶれて、うん／＼苦しむことなどは珍らしくなかつた。煙草もわが國のは木ツ葉をいぶす様で、うまくないと云つてゐる。以前は強酒ヲツカと露西亞煙草とをアレキサンドルから輸入してゐたが、今回、樺太に税關が設けられたので、一旦、大泊りを経てからでなければ手に入らない不便があり、又代價が高くなつたので困つてゐる。露人は赤い色を好む爲め、耕作に従事してゐる男子の赤服が、耕作地によく目につく。つまり、ホワイトシャツの代りに赤地の更紗を用ゐ、夏はそれにツボンで百姓をするのだ。その日の仕事をやめた夕かたには、家族は家毎に門そとの板壁にもたれなどして、睦じさうに語り合ふ。日曜と教祭日には、それでも、仕事をやすみ、相當な衣服を着飾つて遊んだり、酒を飲んだりするのだ。

僕等はレーフといふポーランド人の家族を訪問して見た。牛と豚とを飼つてあつて、農牧を兼業

し、冬になれば、熊や貂を取るのだ。たつた二室の中に、老人夫婦の外に、子息二人とその若い女房等と、この三夫婦の子供と、十二三人の家族が住んでゐる。老爺は十五年前、アレキサンドルの獄から出て來たもので、丸で無教育だ。何か讀むものがあれば見せると云つたら、聖書の古びたのと宗教上のパンフレトらしいのを出して來たが、學校のあつたときは子供が少し讀んだだけで、その他は誰れも分らないと答へた。それでも、マリヤ並に耶穌の肖像畫が居間の兩隅にかざつてある。居間と云つても、親は寢臺に上るが、子供はすべて板の間に寢るのだ。その板の間を靴またはどろ足で歩くのだ。犬や庭鳥、ほうつて置く豚までも、あがつて來る。

室の中央に搖籃がつるしてあつて、二歳になる子を入れて、その母——若い美人であつた——が『バイバイ』とゆすつてゐた。それが泣き出すと、そこから抱き取つて母は板の間に足なげ出して愛しらつた。婦人はすべて帽子の代りに風呂敷見た様なものをかぶつてゐる。多少の慰安になるのだから、手風琴を備へてある。また家族がいつか取つた寫真や、マツチの箱から剝ぎ取つた商標繪などを壁に張りつけてある。淺草公園の安ッぽい繪ハガキもあつた。漢詩を二行に書き下した掛け軸を額のの如く横に張りつけてゐたさうだが、取り去つたのか、その時は見えなかつた。無學な主人ではあるが、露西亞風の熱烈な應待ぶりは、語を解しないものにもその半ばを了解せしめた。渠は移住當時の獨力開墾から自慢話を始め、自分の飼育した馬がアレキサンドルで五百圓に賣れたむかし話をやつて



ゐるかと思へば、直ぐ近頃のことと轉じて、日本人の醉漢があげられて來たのを、鞆を持つて追ッぱらつた喧嘩ばなしになつてゐた。やがて自分の子が取つて來た熊の皮を二枚出して來て、室一杯（八疊敷）にならべ廣げ、その上に寝ころんで見せ、二枚五十圓なら賣らうと云つた。老爺の孫がまたその上に寝ころんだのを、老爺は起きてたはむれに巻きくるんでしまふと、その老婦並に他の家族どもはすべて一齊に笑つてゐた。僕等の一行はその皮二枚を四十五圓で買つた。日露戦争時代の露國石版繪が二三枚あつた露探で清國から秘密をもたらし得た十三歳の少年の行爲を書いてあるのと、一青年士官が日軍の包圍攻撃を受けて奮戦する繪とを、僕等は面白いので、分けてくれないかと云つたら、子供に見せて説明してゐるから、やれないと答へた。露軍がたがどれもこれも勝つてゐるのが面白かつたのだ。黒パンとバタと紅茶とが御馳走だ。老爺は細長いうすの様な物を持つて來て、それでバタをつきまぜる眞似をして見せた。家族のものらは皆そばで大笑をしてゐた。美人なる若い母は僕等が初めて這入つて行つた時、僕等一行中の最も脊高いのを指さし、『ロスキイ、ロスキイ』と冷かした。ほんとに、ロスケの如き脊高童子であつたからだ。この部落中の露人は三四年間に一本の手紙も本國の方へ出したことがない。

また、本國から手紙の來たこともない。然し、或時その一人が一度本國へ出した手紙の意味を翻譯したのを見ると、意外に無邪氣と云はうか、實に僕等の想像にも及ばないことを書いてあつた。乃ち、その文中に樺太はいいところで、氣樂に暮せる。丸で天の樂園の様だから、お前達も早く殺人罪でも犯して、ここへよこして貰ふやうにしろとあつた。

一ヶ所、露人がライ麥を搗く風車があつた。

### 樺太の花植物

樺太の花植物を擧げて見ると、四月末から咲くのに福壽草、やちぶき、などがある。五月に這入つて、えんごさく、きばなのあまな、ねこのめ草、ふき、水芭蕉、一りん草、二りん草、ひめちぢげ。六月になつてこけ桃、ごぜんたちばな、りんね草、(この三種は樺太獨得とも云つていい) わすれな草、すずらん(この種もわざ／＼そこから内地へ送られる) 山しやくやく、石竹、金ぼうげ、えぞかんだう、樺太にんじん、しょうぶ、ひめすゐば、せんだい萩、いかねばら、黒ゆり、いぞつつじ、熊谷草、あつもり草。七月には、えぞにふ(さく)、野ゑんどう、ぶし、鹿ぎく、濱なす、白よもぎ、おほいたどり、おほやまふすま、ばいけい草、車ゆり、山ゆり、野あやめ、北見はたぎを、裏白きんばい、ふうらふ、からまつ草、おほばだいこん、ぼうな、おほばしもつけ草、(俗に誰が袖か)、しらたま草、やなぎらん、こめがや、草ふぢ、あざみ(えぞのきつねあざみ)、くろーばー、七つ葉、金みづひき、くかい草(虎の尾) などだ。



樺太には、平地に高山植物が多く生えてゐるのだ。また稀に發見された草花が幾種類もあるさうだが、まだ命名されてゐない。それらは、今、札幌の農科大學で専門の教授が研究中だ。

### 氷上の舞踏會

樺太にゐたから、氷の話をして呉れるとのことだが、今、僕が樺太の話をしたとて別な讀者が涼しい感じを起すわけのものでもなからうと思ふ。

外國なら、アイスフータ（氷を融かした冷い水であるから、わが國の氷水とは違ふ）を料理のあとで飲ましてくれる。そのアイスフータなり、わが國の氷水なりを飲んでゐる時節には、氷といふものが涼しい感じを與へるだらうが、寒いところにある冷い物は、夏期中に雪の降る芝居を見せる様なもので、矢ッ張り、冬を感じが出ないに決つてゐる。

樺太にゐると、夏でも、袷羽織は必要だ。東京が百度近い暑さだといふ報知が來た時でも、日中、僅かに一二時間が八十度を少し越えたくらゐで、夜になると、寒暖計は直ぐ五十度から六十度の間に落ちてしまつた。

どこに行つても、人家のあるのは海岸ばかりだが、如何に暑いと思つた日中に海を見ても、海水浴をして見ようなどいふ考へは起らない。僕も、去年の夏はあちらで暑さ知らずに過したので、東京に

於ける今年はまだ暑いのに閉口してゐる。

さうかと云つて、樺太は夏でも氷が張つてゐるのではない。九月に這入ると、やがて雪が降り出し、段々それが七尺にも、八尺にもつもる。その上からくになるので、特別にいい坦道が出來、夏よりは却つて交通に自由で、その坦道をアイノの犬橇が走るのである。

さうなると、マオカの不凍港を除いては、どこの海岸も二哩、三哩の沖まで凍つてしまふ。北海道に面するアニワ灣の如きは、大泊——もとのコルサコフ——を起點として、シレトコ、ノトロ兩岬の鼻まで、直徑殆ど八十哩の間が氷にとざされてしまふ。つまり、それだけ、臨時に、氷の埋め立て地が出來るのである。その上を官人などは馬車に乗つて驅けまわることが出来る。

わが官人の冬籠りの樂みはそれくらゐのものだが露西亞時代には、なか／＼盛んなことをやつたものだ。全體、樺太の露西亞人等は、夏の間は精出して働いて置いて、越年時期は、どうせ仕事が出来ないのでから、遊ぶことにしてゐた。して、わが國人の様に引ツ込み思案の計劃ばかりをしてゐないで、共同娛樂に日を送つた。

けふは甲家の催し、あすは乙の順番と、頻りに御馳走の客を招ぎ合つた。それが大きな園遊夜會などになると、白晳々たる氷雪の大平原に出て、そこにかがりを焚き、かがり火の間をすべりつつ幾多の男女は相携へて舞踏にその夜を明すのである。



氷上の舞踏會！ こんなことは夏やることが出来ないと同様、たとへ冬でも、兎角引ツ込み思案の、けちなわが國人には、永久に望めないことであらうか。

### 樺太の女

樺太の美人の話をやと頼まれたのだ。然し之を書く前に鳥渡いい折だから取り消しを出して置きたい。この雑誌でいつか僕を色情狂だと稱し、僕自身が何とかいふ證言をしたといふ記事があつたが、あれは新聞の三面的記事と同様、事實を誇張した筆法である。

これで取り消し文は済んだ。さて、美人と云つても、必らずしも文字通りの意ではなく、何でも女のことを語つたらいいのだらうと思ふ。ところが、樺太は北海道と同様、生憎、固有の女がない。皆内地——たとへば、函館、青森、南部、山形、新潟など——からの渡り者が、北海道からまた渡つて來たのが多い。素人もさうなら、苦勞人も亦さうだ。固有なのはアイノのメノコばかりである。別にギリヤーク人、オロチョン人の女なども數へれば數へられるが、あんまり穢いので、話に入れる必要はなからう。

メノコにはなかくいいのがゐる

ふさ／＼した黒髪を肩のところまで切り放し、鉢巻きの様なものをしてゐる。物を運んだり、兒をしよつたりするには、籠またはふくろの様な物に入れて、脊にまはし、それについた紐を兩方の肩から取つて額に當て、額に當るところは幅廣くなつてゐて、そこに重みを受けるのである。概して體格はうす。一つ悪感を催すのは、上口びるの入れ墨である。人はその入墨を女房になつたしるしだと云ふが、さうには定つてゐないのだ。それも、萬事が日本流になつて來た今日では入れないことになつてゐる。從來の習慣として、まだ男を持つてゐない女は、腰にさげるマキリ（小がたな）が鞆ばかりで身が入れてない。男を持つて、初めて身の這入つたマキリをさげるのである。樺太の開祖オケラと松前侯との間に最古の契約をしたことがある。それは日本官吏が同島へ行つて越年する時は、必らずアイノのメノコ二人を左右に寝かすといふことだ。これは強ち助平根性から命じたのではなく、「さうして寒氣を防いだのだ。

して、近頃の年若いメノコには、露西亞人の血が確かに這入つてゐると見えるのも稀れに見受けるが、日本人の混血兒らしいのが随分ある様だ。渠等は却つてそれを喜ぶのだ。少しでも日本人に近い關係を持つのを——特に若い女は——得意とするらしい。父が日本人であるならなほ更らること、自分の亭主がまたそれであるのを非常に望みとしてゐる。劣等人種の性情は、最も弱い婦人に最もよく顯はれるものだ。で、同人種間の結婚は成るべく避けたいといふのだから、機會さへあれば、一夜で



も優等人種の愛を受けて、それを一生の思ひ出にして置かうとする。だから、非常に濃厚なものだ、  
して、

## 渠等の戀の理想

を順序づけて見ると、第一に番屋の親方（乃ち、一漁場の主人）、次に番屋の帳場、次に船頭、  
次に人さきに出て働く若い衆だ。して、その一生の思ひ出は、淋病や梅毒を受けて、自分等の人種  
の破滅を急がすことにもなるのだ。

僕が或部落へ足を入れた時、アイノの一少女が、佛さまにあげると云つて摘み取つた百合とあやめ  
を手にして、家に歸つて行くのを見た。僕は、その時、つくづく、その少女はいつまでもあの無邪氣  
である方が幸福だらうに思つた。色氣づくに従つて、自分と自分の子孫とを滅亡に急がすのであ  
る。

## 樺太占領以前の露西亞人

の状態も面白かつた。露人は、わが國人とは違つて、外國流の共同娛樂を知つてゐた。夏の間は精  
精働いて、越年時期は遊ぶことにしていたから、海上氷結の白晝々たる大平原で盛んに夜會を開くこ

となどがあつた。けふは甲家の催し、はすは乙家の順番と——して、かがり火の間をすべりつつ、男  
女相携へて、舞踊の徹夜をしたのだ。本邦領になつてからは鯨の大漁で金を儲けたとしても、こせ  
こせと故郷へ持ち歸るので、定住者間にそんな共同的豪遊の出来るものは一人もなかつた。また金を  
使ふことはあつても、自分ばかりの樂みで、共同的なことはしない。海に靈があるものなら、日本人  
のいくじなしを笑つてゐるだらう。その代り、わが邦人は男女間のことに割合に几帳面だが、露人は  
自分の女房が色男を持つなどを平氣でゐる。

僕が國境を越えて、露領ビレオに、そののボルシヨーチャンカ（大官）なる林務官をおとづれた  
時、その人はわが國の官憲と交渉事件の相談にペテルスボルグに行つて留守であつたが、海岸でその  
人の細君と談話することが出来た。細君は亭主の下役なる技師と散歩をしてゐたのだ。それが色男で  
あつたのを後で聞き知つた。亭主はただ普通の生活費を供し、色男は女の贅澤費を出すのが習慣にな  
つてゐるさうだ。露領樺太の主府アレキサンドルに行くと、二三度酒を飲まして懇意になれば、大抵の  
細君は身を許さうだ。或邦人がアレキサンドルで露國の或官吏の家にとまつた。すると、細君を客  
に侍べらして置いて、主人は小兒を抱いて外出し、おそくまで歸らなかつた。翌朝勘定をした時、ま  
だ一つお前は忘れたものがないかと聞いた。それが細君に對する報酬と分つたので、その男は、眞面  
目で、關係しなかつたのだから、ないと云つたら、さうかと云つてすんださうだ。



日本領には、現今、露人の住民は、ナヤシといふところに六七十あるほか、ゐない。軍政時代に大泊、元のコルサコフに、年頃の娘二人と共に一人の露人が住んでゐたが、娘の婚儀を整ふことが出来ないのをいつもかこつてゐた。そのうち、姉妹がわが國の軍人と關係し、梅毒を受けて悲惨な目に會つたことがある。残留露人の女と子供とは、家にゐても、外に出ても、いつも徒足である。ナヤシには、僕等が『ジエムの看板』と命名して置いた露國美人が一人ゐる。それを、その亭主の父が挑んだといふので、家庭におほ騒動が起つたことがある。何と云つても、僅か二室ぐらゐの露助小屋に三組の夫婦小供を入れて十五六名もゐるのだから、そんなことも起りがちなのだ。僕等は、時化の爲め、四日四晩もその地にとどまつてゐたから、露亞西更紗でシャツを縫はすと云つて、その美人を呼び寄せ、はだかになつて、寸法を取らしたことがある。母もついて來たので、酒を飲ましてやらうとする、酔つ拂つて返れば、おやぢにぶちのめされるといふことを、その手で頬ツペたを打つ眞似して答へた。すべてどん百姓だから、男でも女でも、強い酒（日本のは焼酎だ）を一本でも二本でもあけることが出来る。して、大道に酔ひつぶれて、うん／＼うなつてゐることがある。

ナヤシは西海岸だが、それと同じ緯度の東海岸、幌内川の流域には、ギリヤーク人、オロチョン人、サグニス、トングースなどがある。

## ギリヤークの女

は面圓く、扁平で、鬢二すぢを垂らしてゐるか、然らざれば、後頭部に結髪して、大きな耳輪を飾めてゐる。オロチョンの女は、男もさうだが圓面扁平だ。女に辮髪もある。人種が少數で、血族結婚が多いから、畸形兒や病身者が多い。残留露人のうちでも、殆ど孤立的に住んでゐるものは、女が見つかからないので、男子四名で一妻を共有してゐるのがある。オロチョン人の女はトナカヒ（馴鹿）と交換されるので、馴鹿が多いだけ女の價値があがるのだ。そのまた裁判が面白い。或男が他の男の妻を誤つて銃殺したが、それが酋長のさばきで、かう決着した。銃殺者は、銃殺された女が結婚の時受けた馴鹿の數を被害者の夫に與へ、それと同時に、銃殺の妻をも與へたのだ。

今年、また悲惨なことがあつた。オロチョンの酋長ミキポリといふのが、妻を出して、ナポリといふ少女を入れやうとし、酒の勢ひを以つて、それを妻に相談した。妻は聽かないので、酋長は妻を船に乗せて幌内川の眞ん中に浮べ、離縁を承知しなければ、かうすると、脅迫的に妻を水中に投げた。無論、殺す氣ではなかつたのだが、流れが激しかつたので、再び引きあげることが出来なかつて、酋長も俄かにそこで酔ひが醒め、身を投じて浮き沈む妻を助けようとして、力が盡きて、二人とも死んでしまつた。すると、少女ナポリも亦それを聽いて殉死した。

## 本邦人の女



になると、苦勞人のことを話すより仕やうがない様に思はれる。それも初めは實に珍らしかつたのだ。露國人が退いてわが國人がそれに代つた時代などは、實に滑稽なこともあつた。女が殆んどないので、一ごけ（淫賣のこと）を買ふのに、一週間も前から申し込んだり、高等官や判任官は官等順で行つたりして、而も一回數分間に五兩や十兩も取られた。數千金を懐中しながら、衣食住の不自由に苦しみ、木の根を枕として夜を明したり、鐘詰の明き殻に數十人が争つて一條の湧き水を受けて飲んだのはその時代だ。

これは大泊のことだが、西海岸のマヲカでも日本俱樂部といふちひさな獨立政府が建つてゐた時代はさうであつた。それから、明治三十八年、さきの熊谷事務長官の婿に當る若學士（少し馬鹿であつたさうだ）が、眞岡民政支廳長として、都丸に乗つて來た時など、その一味徒黨と共に種々の野心と隠謀とを授けられて來た。妾を用意して來たのもあるし、御用商人をつれて來たのもあるし、料理屋、女郎屋、ごけ屋を開始するものを同道して來たのもある。この時をマヲカの暗黒時代と云ふ。その代り百圓札が人の手から手を飛んでゐたので料理屋と女との最も繁盛した時代だ。して、まだ軍政時代の餘勢があつたから、土木課長が一夜二十兩の約束で、或ごけ屋の女と飲んでゐると、戀敵の憲兵軍曹が這入つて來て、『この生意氣な奴め、斬り殺せ』といふ騒ぎに、課長は取るものも取り敢へず、這ふ／＼の體で、裏口から逃げ出した。

その時代より少し前に、大泊に一人の有名な老ごけがゐた。なか／＼勢力の強い年増で、自分獨りで三日三晩、碌に食事もせず、つづけさまに別な客を取つたり、二十日間も殆ど眠らないで、その業をつづけたりした。之を占領ごけといふ。邦人が占領して行くところへ従つて行き、段々北へ北へと進行したからである。また

#### 四ダースごけ

といふ。獨りでビール四ダースの箱を脊負つて、豊原からマヲカに至る山道十九里を歩み來たり、マヲカでまた人手入らずの獨りごけ屋を初め、數百圓の収入があつたが、そこが女は矢ツ張り女だ、或軍曹に惚れ込み、それまでに得た利益を全くしぼり取られてしまつた。それで初めて男といふものが恐しいといふことを知つたさうだ。

かの女は、それから、また北の方へ進んで行つた。その實場所／＼が開られて行くに従つて、自分よりも若い、いい女が入り込んで來るから、自分の様な年増を買ふものがなくなるからである。現今では、ナヤシに於て、自分がごけ屋の主婦となり、四五名の若い女をやとつてゐる。圓ツこく肥えてなか／＼格腹のいい女だ。當年取つて四十六歳になつたらう。自分の畑を自分で耕してゐるばかりでなく、餘暇を以つて、殘留露西亞人の耕作の手つだひをもしてやつてゐる。またなか／＼氣前もので、



昨年まで有婦の男と一緒になつてゐたが、その男の女房がやつて来たので、すつぱり手を切ると同時に、その夫婦に衣物やら歸國の旅費を拵へてやつた。してまた直ぐ跡の男は出来たらしい。僕等は一夕かの女を酒席に招き、身の上ばなしをさしたが、その實、人のいい、しほらしい女で、物語りが與に入ると、聲をあけて身づからむせび入ることもあつた。

ごけ屋と云へば、露領ビレオに一ヶ所、邦人が開業してゐる。そしてまた、五六名の本邦婦人がゐる。思つたよりも血色がよく、いづれも肥えて、びん／＼してゐる。相手はすべて、その山に働いてゐる露人並に清人の鑛夫、木樵、木挽などだ。僕等が巡視に行つた時は午後三時頃であるが、露清人が十數名、丸い白い玉（番號札の様なものだらう）を持つて洋酒をあふりながら順番の來るのを待つてゐた。渠等は二年三年も山で貯へた金を以つて山を出て來ても、いつのまにか捲きあげられ、歸國の旅費もなくなり、靴まで脱いでしまつて、跣足でアレキサンドルまで二十五里の道を歸るのだ。残酷の様だが、國と國との間がらになれば、何もそんな弱い氣を起す必要はない。あるひは私に獎勵してもいいと思ふ。一回一回五十錢、一時間三圓、一夜八圓を取るさうだ。女もあんなに強健でゐられるなら、さう可愛さうでもない。

## 邦領樺太の藝者

には餘りいい女がゐない。女郎やごけに却つて美人がゐる。それは、商賣女はすべて一様に檢徴をするからである。北海道でも元はさうであつたが、藝者は二枚で鑑札ある。ノダサンといふ所には、某子爵の娘が故あつてごけになつてゐるのがあつた。各種の女は、一昨年來の不景氣で、餘り繁盛してゐない。女郎のあげ代も半額になつたのださうだ。渠等は毎日宿屋へ遊びに來て、なじみの客やかはつた客を發見しようとしてゐる。マオカの旅館には、僕、最も長く滞在したが、隣室に京都の呉服屋がゐて、一名の藝者お何といふのに日夜入りびたられてゐた。その癖、それを占領してゐるわけには行かないのだ。時々悋氣喧嘩が初まる、その仲裁者は僕だ。餘りうるさいので、或時、お何のなじみの或漁場持ちが來た時、かの女がそれに自分の家でおほ散財をさせようと探してゐるのを、僕は渠の飲んでゐるところを知つて知らない振りをしてゐた。或夜、遅く、大道で、『岩野さん、岩野さん』と呼びかけるものがあつた。お何だ。して、今晚こそ渠のゐどころを教へてくれ、探しまはつてゐるのだからと云ふ。餘り可愛さうだから教へてやると、そこから引ツ張り出して自分の家へつれて行つたのだらう、午前二時頃になつて歸つて來て、僕の枕もとに正宗の瓶——お禮のつもりだらう——を置いて、隣室へ這入つて行つた。

北海道から樺太へかけて、淫賣のことをごけ、女郎のことをがの字といふ。ごけとは後室から來たのだらう。どこかで後室が困つて、その多くが淫賣になつた所があつたのだらう。がの字とは北海道



へかせぎに行く女郎がもと雁の歸去と同じ時期に歸去することがあつたから出來た語ださうだ。

## 海 島の婦人生活

樺太の東海岸で、北緯四十八度から四十九度の眞中あたりの海中に、一つのちひさい島がある。テルペニヤ岬の南端に近いところで、周圍は僅かに一里にも足りない。露人等はチュレニもしくはロツペンと名づけてゐたが、わが國人は海豹島と云ふ。

この島は、夏に向つては、膾炙膾炙が群居してゐる。して、禁獵になつてゐる。もし密獵船でも來ると、砲彈によつて退却されるのだ。獸兒の繁殖を計つてゐるからである。

去年などは、雌雄と大小とをかまはず數へて、千八百五十頭ゐた。して、もう、いい加減殖えたから、これを一段落として、入札か、何かで請け負はし、捕獲してしまつてもいいではないかといふ説が盛んであつた。

毎年一定の時期が過ぎれば、どこかへ行つてしまふ。して、また、翌年の同じ時期に集つて來る。然しその集つて來るものがすべて前年のと同じのであるか、どうか、よく分らない。それを試験する爲め、渠等獸の耳の一端を切り落して置いたこともある。然し遠目鏡で見るとは、實際に、その耳の切れたのが來てゐるのか、どうだか、よく分らない。

旅行かたぐい時々、そこへ行く人などは、わざ／＼海獸のゐる一間まぎはまでも近つて見ることもある。五尺も六尺もある獸はうなるのだ。それは、人をこはがつてだが、人はいつ獸に飛びつかれるかも分らないので、ちよつとの間でも、油斷は出來ない。不斷は、決してそんなにそばへ人が行かない。

この海獸の習慣は多妻主義だ。また、共妻主義だ。然しその自分の關係ある牝獸は、他のものには少しでも手をつけさせない。ちやんと決つた勢力範圍がある。して其の範圍を擁護するには、牡はその一身を犠牲にして、一生懸命になるのだ。

牡一匹で牝を四五頭もしくはそれ以上も引き受けてゐる。また、牝二十頭以上を牡三四頭で共有してゐるものもある。して、牡の勢力範圍に入り來たつて、牝を犯さうとするものがあると、その敵が自分等の子であつても、決して許さない。直ぐ喰ひ殺してしまふほどに神経が過敏になるのだ。

して、面白いことには、人間の社會と同じ様に、なまけ者もあれば、獨身者もあり。また、どの家族からも相手にされないものもある。そんなものは、すべて他とはかけ隔つて、自然寂しい日を送らなければならぬ。考へて見ると可哀さうで人ごとではない様な氣もする。ところが、その獨身者のうちには、なか／＼いたづらな奴があつて、ただ寂しい日を送るだけでは満足せず、出來心を起して、他の細君を横取りしようとする。かう云ふいたづら者に限つて、また、なか／＼賢いもので、牡の強



さうなのがある範囲へは近寄らないで、必らず、弱さうな、病身らしい、もしくは頓馬らしい牡の家  
族へ向ふのだ。

それでも、いたづら者がそれと目ざした牝のゐるところへ一たび飛び込むと、一大騒動が初まる。

『何しに來たのだ？』

『一匹おれによこせ。』

『いやおれの物だ。』

『なんだ！そんな朝鮮人見た様な、意久地なしの風をして——』

『馬鹿にするな！』

『この野郎、力づくで來い！』

まアかう云つた風のつかみ合ひになる。目的は牝にあるのだから、力の強い方がそれを喰はへて走  
らうとする。

『さうはさせない。』と、また一方が喰へ返す。情けないことには、兩者とも、手の様なものはあつ  
ても、手だけの働きはないから、口で奪ひ合ひをするのだ。

『よこせ。』『やらない。』で、激烈な引ッ張り合になると、その間に、段々齒のさきが牝に喰ひ入つ  
てしまつて牝は死んでしまふ。勝ちはこちらにあつたにしろ、勝利品は血みどろの亡き骸に過ぎな

5。

女性を保護するのは、獸類でも、なか／＼六箇しいものと見える。不斷でも、さういふ心配をして  
ゐなければならぬ上に、八月頃、子をそだてる時になると、牝の心配と奔走とは非常なことは非常  
だが、その牡の熱心と來たら、海に這入つて自分の餌をあさることもしないで、その身が見るかげも  
なく瘦せて行くのも知らない。ただ一生懸命に自分の家族を保護する爲め敵に隙きを見せない様に努  
めてゐるのだ。

さういふ家族が、僅か十二丁ばかりの海岸の砂上にいくつにも別れて陣取つてゐるのだが、この鳥  
を住所として、また海馬(とど)と云ふ別種類のいたづら者がゐる。鹽臍よりは、ずう體も餘ほど大  
きい。去年は五十頭ばかりゐた。それがぼう／＼とうなり猛つて鹽臍をいぢめ抜くのだ。監視者  
は折さへあれば、この大害物を銃殺するのだが、うか／＼發砲して、その音の爲めに鹽臍の方を島  
から逃がしてしまつては困るので、かけ隔たつた海中にでも首を出してゐる時を見計つて、うち殺す  
のだ。

砂の上では、鹽臍どもは海馬を敬して遠ざけてゐる。渠等は、海馬の周圍には、決して寄りつか  
ない。それをいいしほにして海馬はまた一島の王族の如く意張り散らし、鹽臍どもを十間以外にす  
さらして、自分等はその中央に横たはり、頻りにぼう／＼うなるのだ。



海馬も、臘肭臍も、冬分になると、どこかへ行つてしまふ。して、その跡へ、海豹(アザラシ)の群がやつて来て、この島を一時占領する。海豹は寒いのを平氣だが、臘肭臍は冬は暖い方向向ふ。どこへ行くのか分らないので、その跡を汽船で追ひかけて見たこともあるさうだ。すると、すべてが南の方へ向つたが、途中で二手に別れ、一方は直ちに南太平洋に向ひ、一方は宗谷海峡を日本海の北部に入り、津軽海峡からまた太平洋に出で、消えてしまつたさうだ。

それがすべて、少くとも、それと同じ群れのが、毎年、春になれば、再び海豹島に歸つて来て、再び家族的社會を形作るのだらうが、僕が海豹島の婦人生活と云ふのは、必らずしもそんなことを皮肉つたのではない。この島に於て、不斷、臘肭臍を監視してゐるひとりの婦人がある。その婦人が、たとへ所天があるにせよ、またないにもせよ、かういふ寂しい島に於て、かういふ賑やかな臘肭臍の家族的生活を見てゐる心持ちはどういふ心持ちであらう？これを讀者に想像して貰ひたいのだ。(明治四十三年七月十五日)

## 樺太の思出

山本露滴君。

君は僕に成るべく樺太に關する事を書いて呉れと依頼した。が、去月の中旬來、君も既に東京の諸新聞を見て承知してゐると僕は思ふかの事件の餘波で、來客やら辯駁原稿の執筆やらでまことに暇がなかつた。今回僕が僕の妻と別居して、他の婦人と同棲することになつたのが世間に意外の問題となつて、東京の大抵の新聞ではいろんな風に書き立てた。その中には僕の新婦人が、さきに有夫であつて、小さい子が一名あるのを見て、無責任にも姦通などと書いた。そんな名譽毀損に對してはすべてそれぞれ僕の方に於て訴訟の手續きをするつもりだ。結局、僕の私事——でなければ、僕の革命家としての社會的因襲打破の事業の一部——であるから、別に心配して呉ないでもいい。

兎に角、そんなことで君の依頼の原稿が後れた。さて筆を執つて見ると、——まア、斯うだ——君は現今では樺太日日の主幹などになつて、樺太では意張つてゐられる位地に進んでるが、同島の土地に上陸し、同島で事業を初め、(同島西海岸だけ)の巡遊や調査をした點に於ては、僕の方が君よりもさきであつた。

僕が眞岡から七里ばかり北に當るオタトモでの蟹の罐詰製造に失敗して、殆ど逃げるやうに北海道まで來た時は、君はまだ樺太の實情などは少しも知らなかつた。そして、君も札幌に於てかの大雜誌『實業の北海』の創刊に關して大苦心をしてゐた。ところが、僕の事業が失敗した如く、君の雜誌も二三號に於て全敗してしまつた。僕はその頃まで北海道にとどまつてゐたから、君が他に發展の道を思



案してゐたことは知つてゐた。が、樺太に發展しようとは夢にも氣が付かなかつた。

と云ふのは、當時の日日社長から山野天海氏を経て、僕が同社員を一名東京から周旋することを頼まれたことがあつた。また、君を最後に周旋したのだと云はれる君の先輩なる故人伊藤氏からも、僕が札幌に放浪してゐる頃に、同じことを頼まれた。そして僕はこれを札幌から東京の心當てへ照會して見た。が、そのうち冬が近づいたので、僕も東京へ歸ることになつた。ところが、その必要な社員として、君が僕の札幌出發のあとで行ことになつたのであるとは！

## 二

山本君。

君は本年の春、僕と東京で久し振りに會つた時、蟹の罐詰製造に成功したものは今日に至るまでも殆ど一名もないが、その失敗者等の第一人は僕だと云ふ評判だと僕に云つて聽かせた。して見ると僕ばかりが失敗を耻ぢるにも當るまい。その上、失敗者の連中での第一人者であるのは——あまりいい方でもないとしても——寧ろその先見、若しくは第一經驗たるに於て名譽とすべきであらう。

僕が明治四十一年の六月の何日かに眞岡に上陸して見ると、僕の代理として前から來てゐた弟が——慣れない寒さに三月の頃から當つてた爲めだらう——肺炎を起して病院に這入つてゐた。何でも二枚鑑札。藝者どもを取り扱つてた片岡と云ふ院長がよく世話をしてゐて呉れたので、——また、弟は

まだ年が若く、氣が弱かつただけに、僕の顔を見てからすん／＼よくなつて行つたので、——その方は心配がなかつた。

が、オタトモに於ける事業は、既に全く取り返しのかねやうな状態になつてゐた。僕が東京から弟と共によこして置いた製造技手と云ふのは僕の従兄弟で、無學ではあるが、この道にかけてはなかなか長年の熟練はあつて、僕の製造所の製品だけは一箱四ダス入り毎に他所の製品よりも五十錢高く買はれた。それはその筈で——無經驗な製造者のある他の製造所ではその當時、硫酸紙を必らず中の包み紙に用ゐねばならぬのを、價段が高いと云つて、パラピン紙を使つた爲めに鑑のさびが中身に移つたり、内で工合が程よく行つてゐなかつたので、品が東京まで行く間に腐つてしまつたりした。が、僕のところのは一罐だつてそんなのは出さなかつた。おまけに、他のとは根本的に違つて、あまりよくない身のところなどは贅澤にも切り取つて棄ててゐた。

技術に於ては申しぶんのない技手ではあつたが、如何にも無學なのと僕の代理として全權を有した弟に従はないのと、經濟のあたまが無いのとが缺點であつた。渠は雇ひ人どもや近所の村人どもにただ親かた／＼と云はれたさに、製品の出来るに従つて、披露の爲めだとか云つて二十箱も三十箱も——自分の勝手に——つかひ物などにしてゐた。

## 三

紀行と印象



山本君。

今では、蟹の出盛りにどの位の相場で行つてるか知らないが、その當時は、真岡で一匹二十五錢をしてもオタトモでは七錢であつた。それを百匹なり、二百匹なり、日にこなせるだけ買ひ上げて處分して行けばよかつたのに、僕の馬鹿な技手は——たとへば——毎日四百匹を買ひ占めて、その半分なる二百匹は手が届かないままに腐らせてゐた。そして弟が反對しても、それでははばが利かなくなると思つて従はなかつたのださうだ。

何とか云つて真岡の——僕は今その名を忘れたが——そこのおやぢが海賊のあがりだと身づから意張つてるその旅館に僕はとまり込み、帳面を調べて見ると、仕事を初めてから六月の何日かまでに、もう、三千圓のあがり高はあつた。が、製品はすべて人の手に渡つて。而も現金なり、取るべき金なりが殆ど無かつた。多少は技手の遊蕩費にもなつたらしい。と云つても、それは大したところまでは行つてなかつたが——。

僕が最初から渠等と一緒にゐなかつたのがそも／＼の手落ちだと思つたが、あとの祭りであつた。どうせ取り返しはつかぬと斷念して、僕は弟の看護をしたり、玉突きに耽つたりした。東京での持ち点は八十點であつたのが、毎日何回もやつたので、當時百十點まで突けるやうになつた。

それは兎も角として、山本君、この頃の新聞を見ると、樺太に町村制が布けたり、刺網の許可が出るなりして、同島の住民や雑漁者どもの爲めに結構になつたと思ふ。僕はあの當時に、片手間に東京二六新聞の依頼を受けて、樺太の通信を書き送つてゐた。二六新聞はどうした關係であつたか知れぬが、その幹部がすべて刺網許可主張者であつたので、僕もその意を受けて、建網業者と雑漁者との間の關係や實際に注意した。

僕は全體鯨漁にさうけち臭い制限など——時期に就いても、取り方に於ても——置く必要はないと思ふ、山林の事とは違ひ、海の物を取り盡したツて洪水にはならぬ。鮭なら自分の生れた川へまた子を産みに來るが、鯨はさうきまつてもゐないらしい。鯨が無くなればまた他の事をしたらいいではないか？世界に於ける蟹の有名な産地だツて段々移動して行くのだ。鯨だけがいつまで樺太にとどまるものではない。まして、鯨にはかの臘臍の如き外國との間に、誤つた政策からの共同制限の約束などはないのではないか？そんなことにまで干渉するのは、わが國の舊式なけち臭い官僚癖に過ぎぬ。

四

山本君。

僕は自分の事業がいよく、失敗だと見たので、事業を殆ど斷念した時、たまく／＼時の樺太廳第一部長であつた中川小十郎氏と共に同廳の警邏船吹雪丸に乗つて西海岸を國境まで行つたよ。途中の各アイノ部落、漁場、山林、道路、炭礦、ロスケ村等は一つとして見落さなかつた。同行者は中川氏と僕と



の外に當時の眞岡支廳長乗富氏と君の社の山野天海氏と中川氏の隨行者と、何でも五六名であつた。ラクマカの本廳直轄水産試験場なる物は今どうなつてゐるか知らないが、その時は徒らに大規模にして實際の用には大してなつてゐなかつたやうな——殆ど無用の長物のやうな——感があつた。宗谷ナイボの伐木林のやうすを見に、海岸から二十丁餘りも奥へ踏み込んで歸つて來た時には、部長を初め皆々船中で衣服を脱して、からだ中の山だに退治をやつた。

ノダサンの北端にある小高い山に名が無いと云ふので、僕等は船中でいろ／＼相談して、山の形から見て寢獅子山と命名し、これをその土地の人々に告げて置いた筈だが、今日ではどうなつてしまつただらうか？獅子がつつぶしてゐる形であるからであつた。

トマリオロの炭鑛を見た時、驚いたのは事業の順序を轉倒してゐることであつた。石炭を運搬すべき鐵道工事や立派な官宅建築などは、どし／＼進んでゐたが、肝心の石炭發掘その物があやしいものであつた。第一、第二の鑛口がいづれも六七十尺で絶えてゐた。そしてその炭質はあまりよくも無かつた。當時、十三尺層を發見したとおほさわざをしてゐたのだが、それもその實は三尺層が三つ重なつて、その間に各二尺宛のハサミがあるのであつた。

全體、その時の技師なり監理者なりが如何にも不誠實か不注意であつたよ。着手するに必らずどこかの炭鑛でも——注意深くすれば——四方とその眞ん中とにボーリングをやつて見るものなのに、一ヶ所露出口があると直ぐ永久にでもつづく炭鑛だと速断したかのやうに吹聴してゐた。僕はその當時既に樺太の炭山は斷層が多いのが缺點だと二六新聞に書いた。

## 五

山本君。

チラホナイでは、アイノ部落に山山シロクランケと云ふ老人を特におとづれたことがある。家はロシヤ式に太い丸太を横に組んで壁にしてあり、中はアイノの家にして珍らしいほど廣いのだと皆が云つてゐた。主人の床らしい左の間の中央にあつて熊の皮を敷いてあつた。床の端に『警官席』と書いた半紙の半切れが張つてあるので、そのわけを聴くとその頃ここで部落の人々を集めて浪花節を聴かしたのでこのことであつた。

今でも目に見えるやうだが、その部落で僕が十一二歳のメノコに途中で會つたところ、黄色の花と紫の花とを携へて行くのだ。

『それをどうするの』と僕が聴き糺すと、

『百合とあやめ——佛さまにあげるのであります』と答へた。

ウシヨロ灣の土人どもが僕等を出迎へた時は、ちよつと異様な偉觀であつた。すべて黒びらうどの筒袖で胸をぼたんでとめた、膝までの衣物を着て——これは露領アレキサンドリアから來た品ださう



であつたが、——細い紐をしめてゐた。そして額をすつと剃り込んだあたまの眞ツ黒な髪をふさぐと肩まで垂らし、うわひげも多く、頬ひげ、あごひげ、長いのが、ずらりと海岸に並んでるのを見た時は、それまでに見た部落ではおぼえない寂しさと凄みとがあつた。

渠等は銀色の大きな耳輪をつけてるのを誇つてゐた。土人の總代なる可なり日本語を話すのに、宗旨は何かと尋ねると、『神道のやうなもので、萬物みな神』と答へた。

天候險惡の爲め僕等はクシュンナイに三晩もとまつたが、ナヤンに於ては四晩もとまらねばならぬはめになつた。

## 六

山本君。

當時のナヤンは西海岸を北への最後の都會(?)として、戸數が四十、人口百八十あつた。そのうち、残留露國人が九戸、六十八名ゐた。僕等は支廳の通譯を連れてロスケ部落を巡視し、レーフと云ふポーランド人の家族を訪問した。老人夫婦の外に息子二人とその若い女房どもと、この三夫婦の子供と、十二三人の家族だ。その癖、部屋と云つたらたつた一室で、そこにペチカが暖爐兼用の釜土であり食堂、寢室、應接間もこの室であつた。

親は寢臺に眠り、子供はすべて下の板の間に蒲團を敷いて寝るのであつた。僕等はその板の間へ靴若しくは下駄のままのぼつたが、その子供もどろ足のままあがつてゐたし。犬や庭鳥も平氣で這入つてゐた。壁にはその家族がいつか取つた寫眞やマチの箱から剥ぎ取つた商標繪や、東京淺草公園の安ッぽい繪はがきやが張り付けてあつた。マリヤ並にキリストの肖像畫はその居間の兩隅に飾つてあつた。

レーフと云ふおやぢはもう死んだかも知れないが、その時の話で十五年前にアレキサンドルの獄から出て來た者で、どうせどこへ行つても暮しは同じだから、いッそのこと馴れたこの土地の方がいと云つてゐた。何か讀む書物があれば見せると僕等が語つた時、聖書の古びたのと宗教上のパンフレトらしいのを出して來たが、子供が少し見ただけでその他のものは誰も讀めないと答へた。

渠は全く無學な者らしかつたが、その熱烈な應待振りは露國語を解しない僕等にもその半ばを了解せしめた。渠は移住當時の獨力開墾のことから自慢話を初め、自分の飼育した馬がアレキサンドルで五百圓に賣れたむかし嘶をやつてるかと思へば、直ぐ近頃のことにと轉じて、日本人の酔ッ拂ひがあばれて來たのを鐵を以つて追ッ拂つた話になつてゐた。ところでこのおやぢ、自分の息子の女房を引ッ懸けやうとしたので、その息子とつひこの間おほ喧嘩をして死ぬか生きるかの騒ぎであつたことなどは殆ど忘れてゐたやうであつた。

## 七

紀行と印象



山本君。

僕等はそのロスケおやぢから熊の皮を安く買はうとした。渠は自分の取つた熊を、自分で剥いだと云ふその皮を二枚、その室の板の間——八疊敷ばかりの——に廣げ、山で取つた時の手から話をしながら、皮の上に寝ころんで見せた。二枚で五十圓なら賣らうと云つたのを、僕等の一人なる中川部長は四十圓に價切つたが、話がまとまらなかつた。そしておやぢの孫なる一人の子どもがまたその皮の上をころげまはつて、『これはおぢいさんが山から取つて來たのだ』と自慢さうに云ふやうであつた。

日露戦争時代の石版繪が二三枚あつた。露探として清國から秘密をもたらし得た十三歳の露西亞少年の勇敢な行爲を書いてあるのと、一青年士官が日軍の包圍攻撃を切り破つて奮戦するの——僕等の目には珍らしかつたので——賣り渡して呉れないかと頼んで見たところ、子供に見せて教育の爲めに説明してゐるから困ると答へた。

その日は僕等がそこで黒パンと紅茶とを御馳走になつて歸つたが、翌日また同じ家をおとづれた。中川部長は二枚の熊の皮を四十五圓で買ふ爲めだが、他のものはその息子の一人の若い細君（十八才であつた）の顔を再び見に行く爲めであつた。ロスケ村中での美人であつたのだ。美人である爲めにその息子のおやぢも多分引ツかけて見ようとしたのらしかつた。

その美人をまた僕等は母と共に僕等の宿にこさせて、洋服を着る習慣のものは皆自分等のからだの

寸法を計らせた。と云ふのは、同家から貯へのロシヤ更紗を買つて、ワイシャツを縫はせたからであつた。

今のナヤシではどうか知らないがその時のロスケ畑には、青い草の間に白服の女、赤服の男が夫婦幾組にも分れて牧草を刈つたり、刈つた草を返したりしてゐた。一ヶ所ライ麥を搗く大きな風車があつた。日本人の癖として、農業と牧畜とを別々にするが、ロスケの農牧兼業——は殊に、樺太のやうなところでは——最も適當なやり方だと僕には思はれた。

## 八

山本君。

ナヤシのロシヤ更紗で思ひ出すのは君の社の山野天海氏の甚だずるかつたことだよ。渠も僕も同じやうにその更紗を買つた。渠のは白地で僕のは赤地であつた。それから共に眞岡へ歸つてからのこと、渠は僕の更紗の模様が如何にも氣に入つたから取り換へて呉れと僕に頼んだ。僕は本氣で先づ僕のを渠に渡したところ、それツ切りわざと忘れたかのやうにその後會つても僕に渠のを渡さうと云ふ様子が無かつた。一二度催促したが、何とか言を左右して逃げたので、僕もそれツ切りやつたつもりにした。その代り、僕も同氏から渠の所有だと云ふ小さなロスケ小屋を一つ買ひ取つて、その冬をそこに過して見ようとしたのだが、事業の失敗でおのづと破談してしまつた。



渠はよく勢ひのいいことを云つてたが。船には極よわく、またトマリオロの奥で或川の丸木橋を渡らうとした時などの様子は。……あの大きな太いからだの爲めでもあらうが、……ぐらぐらと足が立たず、とう／＼橋を渡り切れないので、川の中をかち渡つたよ。

ナヤシのことでは、また僕が雨の中を獨りでぶらついた時、むしろをから傘の形に建てまわしてその中に住んでる夫婦者があるのを見た。よく聽いて見ると、或漁場に雇れて来て六ヶ月間も一文の給金も與へられず、おまけにその漁場は失敗して、親かたは逃走してしまつた爲め、歸へるにも歸られず、歸國の旅取をつくる考へで毎日人仕事に出てゐると云ふのであつた。若し秋までに旅費が出来ねば、冬の貂取りにでも使はれようと思ふと云つた。今でもさうだらう。山本君。ナヤシは貂の多いところで、その皮は一枚十八圓から三十圓に賣れてゐた。

それから、同所にはまた、眞岡では四ダース後家と呼ばれた、そして樺太全體では占領後家の名があつた女が、北へ北へと流れて行つたとどのつまりの踏みどまり場として、自分で料理屋を開いてゐた。僕等はかの女を一夕宿に呼んで身の上ばなしを聽いた。中川部長などは涙を流して聽いた。

## 九

山本君。

樺太は北に行くほど山が高く、火山的に山のさきが尖つてゐる。昔の地圖にトルストイの鼻となつて

る安別の岬の絶頂には、國境標の柵が見え、その鼻から續いて露領に延びた低い草山は、灣形にまた北へ突出して行つて、ピレオ富士を現じてゐる。

僕等は安別の海岸から、切り崖のやうな山腹に細い道を切り拓いた稻妻形をのぼり、寫眞師をつれて國境標のあるところへ行つた。柵をめぐらした中に花崗石の標があり、南面には菊の紋、北面には鷲を刻してあつた。そこでいろんな寫眞を取つたうち、天海氏と僕とは南北に腰かけて寫したのがあつた。あの寫眞を山本君、僕は今持つてゐないが、——否、寫したツきりで僕はまだ見ないのだが、豊原で誰れかが持つてる筈だ。若しあつたら貰ひたいものだ。天海氏が持つてたら、さきの更紗の代りに送らせて呉れ給へ。

國境には林空が五六間の幅で東の方へ一直線に走つてゐた。

僕は海からまだ洋行したことはないが、陸上からはこの國境から——たつた一里半ばかりだが、——外國行きをやつた。乃ちピレオまでだ。

そこにギリヤーク人の一部落があり、また日本人の淫賣屋が一軒あつて、六名の日本娘がその奥の木材會社工場から出て来る露國人、支那人等を晝間でも相手にしてゐた。

僕等はそこを一巡してから、一露國商人と云つても、もとは共に殺人者なる夫婦——の家で馳走になつた。



思ひ出せばまだ、いろいろなことが云へるだらうが、こんなことを長く書いてゐてもいいかどうか  
分らないから、君、これで一先づ中止させて貰ふ。

泡鳴全集 第十一卷 終

大正十年九月廿五日印刷  
大正十年九月廿八日發行



發行所

著者 岩野美衛

國民圖書株式會社代表者

發行者 中塚榮次郎

東京市麴町區内幸町一丁目六番地

印刷者 長谷川美麿

東京市麴町區山元町二丁目十四番地

印刷所 國民圖書株式會社

東京市麴區内幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

電話銀座七八三番  
振替東京五二二九八番

泡鳴全集 十一卷 (非賣品)

個製本



發行所

東京市神田區神保町一丁目六番地  
圓貝圖書社友會振

電話東京五三二八八番  
墨田區錦町五十八番



印刷所 圓貝圖書社友會振

東京市神田區山王町二丁目十四番地

印刷者 貝谷川美堂

東京市神田區神保町一丁目六番地

發行所 中瀨榮次郎

東京市神田區神保町一丁目六番地

印刷者 峯雅美齋

定價全册十一卷

(表裏)

附録本

大正十一年六月廿五日發行  
大正十一年六月廿五日發行



Handwritten text in a decorative blue border, possibly a title or date.





